

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
旧約聖書原典講読 I a	左近 豊
前期・2単位	<登録条件>
<p><授業のテーマ> 旧約聖書ヒブル語本文を批判的手続きを経ながら読む。</p>	
<p><到達目標> テキストの文献学的諸問題、そして文芸学的特長を把握することができるようになる。</p>	
<p><授業の概要> エレミヤ書と哀歌を取り上げる。それぞれに旧約の民の歩みの重要な局面で語られた言葉であり、旧約聖書の人間観、世界観、そして歴史観を反映している。写本、古代訳を参照しつつヒブル語本文を読む。教会での説教、聖書研究における積義に資する諸資料の紹介と活用の実際を学ぶ。</p>	
<p><履修条件> ヒブル語文法履修者</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回：エレミヤ書 序 2:1-3 第2回：エレミヤ書 2:4-6 第3回：エレミヤ書 2:7-9 第4回：エレミヤ書 2:10- 第5回：エレミヤ書 2:14-16 第6回：エレミヤ書 2:17-19 第7回：エレミヤ書 2:17-19 第8回：エレミヤ書 2:20-22 第9回：エレミヤ書 2:23-25 第10回：エレミヤ書 2:26-28 第11回：エレミヤ書 2:29-32 第12回：哀歌 1:12-14 第13回：哀歌 1:15-17 第14回：哀歌 1:18-20 第15回：哀歌 1:21-22</p>	
<p><準備学習等の指示> 事前に当該箇所の積義上の諸問題を把握し、神学的思索を携えて授業に臨むことが望ましい。</p>	
<p><テキスト> <i>Biblia Hebraica Stuttgartensia</i> (BHS)</p>	
<p><参考書> 辞書:F.Brown, S.R.Driver, and C.A.Briggs eds., <i>Hebrew and English Lexicon of the Old Testament</i>. (BDB)、L. Koehler and W.Baumgartner, <i>The Hebrew and Aramaic Lexicon of the Old Testament (HALOT)</i>、 文法書:<i>Gesenius' Hebrew Grammar</i>, B.Waltke and M.O'Connor, <i>An Introduction to Biblical Hebrew Syntax</i>, H.Bauer and P.Leander, <i>Historische Grammatik der hebraeischen Sprache</i>. 参考書:ヴェルトヴァイン著『旧約聖書の本文研究』、E.Tov, <i>Textual Criticism of the Hebrew Bible</i>、『左近淑著作集 III』、Field, <i>Origenis Hexapla</i> コンコルダンス:Lisowsky, <i>Konkordanz zum Hebraeischen Alten Testament</i>、S.Mandelkern, <i>Veteris Testamenti concordantiae hebraicae atque chaldaicae</i>、E.Hatch and H.A.Redpath, <i>A Concordance to the Septuagint and the other Greek Versions of the Old Testament (LXX)</i> など</p>	
<p><学生に対する評価(方法・基準)> 授業参加 40% 期末レポート 60%</p>	

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
旧約聖書原典講読Ⅱ a	小友 聡
前期・2単位	<登録条件> 後期と連続している。
<p><授業のテーマ> ヒブル語未履修者のためにコンパクトなヒブル語文法書を用い、その練習問題を解きながら基礎文法を学ぶ。</p>	
<p><到達目標> ヒブル語文法の基礎文法を理解し、辞書を用い、独力でヒブル語本文を直訳できるようになる。</p>	
<p><授業の概要> 毎週、文法書の章末にある練習問題を扱う。文法の説明は最小限にし、練習問題を扱う中で行う。</p>	
<p><履修条件> ヒブル語基礎文法の未修得者。やる気があり、最後まで諦めない人。</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回：ガイダンス、読み方の練習1, 2 第2回：64頁、練習1 第3回：69頁、練習2 第4回：75頁、練習3 第5回：81頁、練習4 第6回：88頁、練習5 第7回：93頁、練習6 第8回：99頁、練習7 第9回：103頁、練習8 第10回：118頁、練習9 第11回：111頁、練習10 第12回：115頁、練習11 第13回：120頁、練習12 第14回：124頁、練習13 第15回：129頁、練習14</p>	
<p><準備学習等の指示> 毎回、練習問題をやってもらうこと。ただ授業に参加するだけでは意味がない。</p>	
<p><テキスト> ハインツ・クルーゼ著『旧約聖書 ヘブライ語文法書』、キリスト新聞社、3,000円。</p>	
<p><参考書> 辞書は、W.L.Holladay, A Concise Hebrew and Aramaic Lexicon of the Old Testament, を用いる。そのほか、授業の中で適宜、紹介する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 授業への参加度で評価する。</p>	

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
旧約聖書原典講読Ⅱ b	小友 聡
後期・2単位	<登録条件> 前期と連続している。
<p><授業のテーマ> ヒブル語の基本文法を理解したうえで、ダニエル書の講読をする。</p>	
<p><到達目標> ヒブル語文法の基礎を理解し、辞書を用い、独力でヒブル語本文を直訳できるようになる。</p>	
<p><授業の概要> 前半は文法書の章末にある練習問題の残りを扱う。学期後半はダニエル書の講読をする。</p>	
<p><履修条件> 前期の到達点に達している人。やる気があり、最後まで諦めない人。</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回：135頁、練習15 第2回：140頁、練習16 第3回：144頁、練習17 第4回：150頁、練習18 第5回：ダニエル書1章1-3節 第6回：ダニエル書1章4-6節 第7回：ダニエル書1章7-9節 第8回：ダニエル書1章10-12節 第9回：ダニエル書1章13-15節 第10回：ダニエル書1章16-18節 第11回：ダニエル書1章19-21節 第12回：ダニエル書2章1-4節 第13回：ダニエル書12章1-4節 第14回：ダニエル書12章5-8節 第15回：ダニエル書12章9-13節</p>	
<p><準備学習等の指示> 毎回、予習をして授業に臨むこと。</p>	
<p><テキスト> ハインツ・クルーゼ著『旧約聖書 ヘブライ語文法書』、キリスト新聞社、3,000円（前期に用いたもの）。 Biblia Hebraica Stuttgartensia (BHS).</p>	
<p><参考書> 辞書は、W.L.Holladay, A Concise Hebrew and Aramaic Lexicon of the Old Testament, を用いるが、さらに、 F.Brown, S.R.Driver and C.A.Briggs, Hebrew and English Lexicon of the Old Testament (BDB) も必要。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 授業への参加度で評価する。</p>	

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
旧約聖書原典釈義Ⅱ a	本間 敏雄
前期・2単位	<登録条件>
<p><授業のテーマ> 創世記8, 9章の洪水、ノア物語をヒブル語原典(マソラ本文)において釈義する。<ソーフェリームの修正>伝承について学ぶ。</p>	
<p><到達目標> ヒブル語印刷聖書(BHS, BHQ)本文の基礎知識、構文分析、釈義の諸方法論を修得し、当該テキストを本文学的に釈義する。印刷聖書脚注の内容判断と本文学的評価ができる。<ソーフェリームの修正>伝承個所の調査により、全体像と内容を把握できる。</p>	
<p><授業の概要> 創世記8, 9章の洪水、ノア物語をレニングラード写本(L)で読み、構文分析及び本文批判、文献批判、伝承史等釈義的諸方法を検討しつつ釈義する。マソラ及びヒブル語本文の諸現象に留意し、テキスト理解を深めたい。BHS, BHQ及びレニングラード写本の基礎知識も学ぶ。その関連で、近現代の印刷聖書の脚注に見られ、諸翻訳に影響を及ぼしてきた<ソーフェリームの修正>伝承個所について調査する。その伝承が言う<オリジナル本文>とは何か。その実像と内容、諸翻訳との関係について学ぶ。後期課程「旧約聖書特殊研究a」と合同。</p>	
<p><履修条件> ヒブル語基礎文法修得者</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回 創世記8:1-5 洪水・ノア物語の全体像、洪水の停止 第2回 8:6-9 鳥と鳩 第3回 8:10-14 地の面、乾く 第4回 8:15-20 箱舟から出る 第5回 8:21-22 ヤハウエの決意 第6回 五書研究史(資料説)と洪水物語 第7回 9:1-3 祝福 第8回 9:4-7 流血の賠償 第9回 9:8-11 ノアとの契約 第10回 9:12-17 契約のしるし 第11回 9:18-23 ノアと息子たち 第12回 9:24-28 呪いと祝福 第13回 洪水、ノア物語総括:ノア契約の神学 第14回 <ソーフェリームの修正>伝承(1)当該語/テキストとBHS脚注情報・表記法 第15回 " (2)伝承内容と分析、諸翻訳</p>	
<p><準備学習等の指示></p>	
<p><テキスト> Biblia Hebraica Stuttgartensia(BHS):Genesis、Biblia Hebraica Quinta(BHQ):Genesis、レニングラード写本(Codex Leningradensis)写真版。「ヒブル語入門」(改訂増補版 左近/本間)(10.文の構造(構文論)、12補説:本文の諸現象(補注一覽))。<ソーフェリームの修正>伝承については上記BHS(一卷本)等の他「翻訳と本文」(17)-(22)(『形成』293-299号所収(1995))。専門的資料は特研参照。</p>	
<p><参考書> 「旧約聖書釈義入門」(H.バルト/O.H.シュテック 山我哲雄訳)。「ヘブライ語聖書への手引き」(R.ウオンネベルガー 松田伊作訳)、A simplified guide to BHS(H.P.Rueger)。「旧約聖書の本文研究」(E.ヴェルトヴァイン 鍋谷/本間共訳)。諸註解、文献は順次提示する。</p>	
<p><学生に対する評価(方法・基準)> 課題の発表と討議、レポートの総合で評価する。</p>	

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
旧約聖書原典釈義Ⅱb	本間 敏雄
後期・2単位	<登録条件>
<p><授業のテーマ> 創世記10章ノアの系図と11章バベル物語及びセムの系図をヒブル語原典（マソラ本文）において釈義する。 <ソーフェリームの修正>伝承を精査し、本文学的、釈義的意義を考察する。</p>	
<p><到達目標> ヒブル語印刷聖書（BHS, BHQ）本文の基礎知識、構文分析、釈義の諸方法論を修得し、当該テキストを本文学的に釈義する。印刷聖書脚注の内容判断と本文学的評価ができる。<ソーフェリームの修正>伝承個所の精査により、ヒブル語マソラ本文と解釈、諸翻訳との関係性について認識できる。</p>	
<p><授業の概要> 創世記10, 11章をレニングラード写本（L）で読み、構文及び本文批判、文献批判、伝承史等釈義的諸方法を検討しつつ釈義する。マソラ及びヒブル語本文の諸現象に留意し、テキスト理解を深めたい。BHS, BHQ及びレニングラード写本の基礎知識も学ぶ。その関連で、前期に続いて<ソーフェリームの修正><オリジナル>伝承について考察し、後期は幾つかの代表的箇所で釈義的に考察する。また伝承の特質と神学的背景を把握し、本文学的意義と評価基準を考察する。後期課程「旧約聖書特殊研究b」と合同。</p>	
<p><履修条件> ヒブル語基礎文法修得者</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回 創世記10：1－5 ノアの子孫 第2回 10：6－9 ニムロド 第3回 10：10－12 ニムロドの王国 第4回 10：13－20 ミツライムとカナンの子孫 第5回 10：21－32 セムの子孫 第6回 ノアの系図と神学 第7回 <ソーフェリームの修正>伝承（3）エゼ8:17,ハバ1:12,ヨブ32:3等解釈 第8回 " (4)全体像と特質、神学的背景、評価基準 第9回 11：1－4 バベルの塔 第10回 11：5－7 言葉の混乱 第11回 11：8－9 バベル伝承と神学 第12回 11：10－23 セムの系図 第13回 11：24－30 テラの系図 第14回 11：31－32 テラとアブラムの旅 第15回 セムの系図と神学</p>	
<p><準備学習等の指示></p>	
<p><テキスト> Biblia Hebraica Stuttgartensia(BHS):Genesis、Biblia Hebraica Quinta(BHQ):Genesis、レニングラード写本（Codex Leningradensis）写真版。「ヒブル語入門」（改訂増補版 左近／本間）（10.文の構造（構文論）、12補説：本文の諸現象（補注一覧））。<ソーフェリームの修正>伝承については上記BHS（一卷本）等の他「翻訳と本文」（17）－（22）（『形成』293－299号（1995））。専門的資料は特研参照。</p>	
<p><参考書> 「旧約聖書釈義入門」（H.バルト／O.H.シュテック 山我哲雄訳）。「ヘブライ語聖書への手引き」（R.ウオンネベルガー 松田伊作訳）、A simplified guide to BHS（H.P.Rueger）。「旧約聖書の本文研究」（E.ヴェルトヴァイン 鍋谷／本間共訳）。諸註解、文献は順次提示する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 課題の発表と討議、レポートの総合で評価する。</p>	

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
旧約聖書神学特講 I a	小友 聡
前期・2単位	<登録条件>
<p><授業のテーマ> 雅歌について解釈の可能性と方法論を探究する。</p>	
<p><到達目標> 旧約聖書の中で最も難しい「雅歌」を理解する。</p>	
<p><授業の概要> 諸論文を読み、雅歌解釈の方法についてあらゆる可能性を考える。後半は雅歌のテキストを丹念に読む。</p>	
<p><履修条件> ヒブル語基礎文法を学んだ人。雅歌の解釈に興味がある人。</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回：オリエンテーション、雅歌とはどういう書か。 第2回：雅歌の歴史批評的解釈 第3回：雅歌の比喩的解釈 第4回：雅歌の哲学的解釈 第5回：雅歌解釈の可能性 第6回：雅歌の構造を検討する 第7回：雅歌1章 第8回：雅歌2章 第9回：雅歌3章 第10回：雅歌4章 第11回：雅歌5章 第12回：雅歌6章 第13回：雅歌7章 第14回：雅歌8章 第15回：まとめ</p>	
<p><準備学習等の指示> 前半は解釈の方法論について議論し、後半は雅歌テキストを1章ずつ積義する。準備して参加すること。</p>	
<p><テキスト> BHSを用いる。雅歌解釈の方法論については、並木浩一「雅歌 牧歌の伝統を革新する愛の表現」『著作集3』、オリゲネス（小高訳）『雅歌注解・講話』、永井晋「雅歌の形而上学/生命の現象学」『現代思想 レヴィナス』等。</p>	
<p><参考書> その都度、指示する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 授業への参加度と学期末に雅歌に関する提出レポート（6000字）によって評価する。</p>	

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
旧約聖書神学特講 I b	小友 聡
後期・2単位	<登録条件>
<p><授業のテーマ> R. E. クレメンツ編『古代イスラエルの世界』を精読する。</p>	
<p><到達目標> 現代イギリスの旧約学の知見を得る。</p>	
<p><授業の概要> 社会学、人類学、政治学の観点から論じられた旧約論文を読み、古代イスラエル世界を多面的に考察する。演習形式で行う。</p>	
<p><履修条件> ヒブル語を履修していない旧約専攻外の学生に開かれた授業である。</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回：オリエンテーション 第2回：「歴史的・文化的背景に照らしたイスラエル」(R. E. クレメンツ) 第3回：「部族社会としてのイスラエル」(J. D. マーティン) 第4回：「イスラエルの王権」(K. W. ホワイトラム) 第5回：「変容するイスラエルの概念」(H. G. M. ウィリアムソン) 第6回：「ユダヤ人ディアスポラの起源」(R. J. コギンズ) 第7回：「預言と社会」(R. P. キャロル) 第8回：「知恵文学作家の社会的環境世界」(R. N. ワイブレイ) 第9回：「黙示文書の社会的環境世界」(P. W. デイヴィス) 第10回：「聖なるものと祭儀」(P. J. バッド) 第11回：「聖戦の概念」(G. H. ジョーンズ) 第12回：「古代イスラエルにおける契約概念」(R. デヴィッドソン) 第13回：「土地」(E. W. デイヴィス) 第14回：「古代イスラエルにおける女性」(G. E. エマーソン) 第15回：「旧約聖書における生と死」(M. A. ニブ)</p>	
<p><準備学習等の指示> 毎回担当者に論文の内容報告をしていただき、それに基づいて討議する。全員に発言を求める。</p>	
<p><テキスト> R. E. クレメンツ編(木田/月本監訳)『古代イスラエルの世界 社会学・人類学・政治学からの展望』、リトン、2002年(定価10,000円)。高価な翻訳書なので、用意できない人には図書館でコピーしていただく。</p>	
<p><参考書> その都度指示する。</p>	
<p><学生に対する評価(方法・基準)> 発表と授業への積極性、また学期末の提出レポート(約6000字)によって評価する。</p>	

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
旧約聖書学特研Ⅱb	大住 雄一
後期・2単位	<登録条件>
<p><授業のテーマ> 旧約聖書の神学、釈義的課題、歴史の諸問題のなかからひとつの課題を取り上げ、深く掘り下げる特殊研究クラスである。</p>	
<p><到達目標> 教会の正典としての旧約聖書の意義を理解し、論じることができるようになる。</p>	
<p><授業の概要> 本年度は、旧約聖書の根本問題である契約について、契約の成立を保証する「契約場面」を精査し、儀式の意味や、それによって見えてくる契約の特質を吟味する。</p>	
<p><履修条件> テキストの講読に耐えるヒブル語の基礎知識、または、契約に関する教義的素養があるとよい。</p>	
<p><授業計画></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 導入 代表的な「契約場面」 2. 創世記15：7-21 3. 創世記17：1-14 4. 創世記28：10-22 5. 創世記35：1-15 6. 出エジプト記19：3-9 7. 出エジプト記19：10-25 8. 出エジプト記24：1-2、9-11 9. 出エジプト記24：3-8 10. 出エジプト記34：1-10、28 11. 申命記7：1-15 12. 申命記7：16-26 13. 申命記26：5-19 14. 申命記30：1-14 15. まとめ 申命記31：24-30、32：43-47 	
<p><準備学習等の指示> 毎回、示された箇所のテキストを、できればヒブル語で、よく読んでくること。</p>	
<p><テキスト> Biblia Hebraica Stuttgartensis, Biblia Hebraica Quinta</p>	
<p><参考書></p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 毎回の発表によって、評価する。</p>	

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
旧約聖書学演習Ⅱ a	大住 雄一
前期・2単位	<登録条件>
<授業のテーマ> 旧約聖書の諸主題、あるいは旧約聖書を読む場合の諸課題を共に学ぶ。	
<到達目標> ヒブル語を履修していない人、聖書神学(旧約聖書神学)専攻でない人でも、「ヒブル語で」旧約聖書が読めるようになる。	
<授業の概要> 「モーセの歌」とは何かを、究明する。	
<履修条件>	
<p><授業計画></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 導入 ヒブル語で詩を読むということ 2. 「岩」 3. 異なる神 4. バシヤンの雄牛 5. エシュルン 6. 主の嫉み 7. 民の忘恩 8. 主の矢 9. 主が渡されなかったなら 10. ソドムのぶどうの木、ゴモラの畑 11. 主が報復する 12. どこにいるのか、彼らの神々は。 13. 私こそ、私こそそれだ 14. 私は殺し、また生かす。 15. まとめ あなたたちの命であるこの言葉 	
<準備学習等の指示>	
<テキスト>	
<参考書> そのつど指示する。	
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業で割り当てられた課題の発表を含む授業参加度によって評価する。	

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
旧約聖書学演習Ⅱ b	大住 雄一
後期・2単位	<登録条件>
<授業のテーマ> 旧約聖書の諸主題、あるいは旧約聖書を読む場合の諸課題を共に学ぶ。	
<到達目標> ヒブル語を履修していない人、聖書神学(旧約聖書神学)専攻でない人でも、「ヒブル語で」旧約聖書が読めるようになる。	
<授業の概要> 前期「旧約聖書学演習Ⅱ a」の続きであるが、後期のみの履修も可。bでは、「モーセの祝福」とは何かを、究明する。	
<履修条件>	
<授業計画> <ol style="list-style-type: none"> 1. 導入 ヤコブの祝福 モーセの祝福 2. シナイ、セイル、パラン 3. ルベンは、数が少ない。 4. ユダは、戦う。 5. レビの特殊性 6. ベニヤミンの守り 7. ヨセフの賜物 8. ゼブルンの海 9. イッサカルの山 10. ガドの土地 11. ダンの沃地 12. ナフタリの恵み 13. アシエル我的祝福 14. シメオンはどこへ行った？ 15. まとめ、エシュルンの神 	
<準備学習等の指示>	
<テキスト>	
<参考書> そのつど指示する。	
<学生に対する評価(方法・基準)> 授業で割り当てられた課題の発表を含む授業参加度によって評価する。	

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
シリア語 a	佐藤 泉
前期・2単位	<登録条件> 通年で履修するのが望ましい。
<授業のテーマ> 聖書の古代訳の一つにペシッタ（シリア語訳）がある。ペシッタを読むためのシリア語文法の基礎を学ぶ。	
<到達目標> ①シリア語文法の基礎を身につける。②身につけたシリア語文法の基礎を生かし、辞書も用いながら、ペシッタを読むことができるようになる。	
<授業の概要> 練習問題に取り組むながら、ペシッタを読むために必要なシリア語文法を学ぶ。	
<履修条件> ヒブル語履修済みであることが望ましい。	
<p><授業計画></p> <p>第1回：序 シリア語を学ぶ意義等話し、子音について（1）ヤコブ派の書体を学ぶ。</p> <p>第2回：子音について（2） ネストリウス派とエストラングラの書体を学ぶ。</p> <p>第3回：母音について ヤコブ派とネストリウス派の母音記号を学ぶ。</p> <p>第4回：代名詞について 人称・指示・疑問・関係代名詞を学ぶ。</p> <p>第5回：前置詞について 基本的なものをいくつか学ぶ。</p> <p>第6回：名詞について（1） 基本的な名詞について、ヘブライ語との比較をしつつ、その特徴を学ぶ。</p> <p>第7回：代名詞語尾について ヘブライ語と同様にシリア語も名詞等に代名詞語尾がつくことを学ぶ。</p> <p>第8回：名詞について（2） 母音の移動を伴うものを学ぶ。</p> <p>第9回：名詞について（3） 不規則変化するものを学ぶ。</p> <p>第10回：規則動詞について（1） Peal 形の変化、特に完了を学ぶ。</p> <p>第11回：規則動詞について（2） Peal 形の変化、特に未完了・命令・分詞・不定詞を学ぶ。</p> <p>第12回：規則動詞について（3） Ethpeel 形の変化を学ぶ。</p> <p>第13回：規則動詞について（4） Pael 形と Ethpael 形の変化を学ぶ。</p> <p>第14回：規則動詞について（5） Aphel 形と Ettaphal 形の変化を学ぶ。</p> <p>第15回：規則動詞について（6） 代名詞語尾のついた形の変化を学ぶ。</p>	
<準備学習等の指示> 授業中に指示のあった練習問題等について、できる範囲で準備すること。	
<テキスト> Theodore H. Robinson, Paradigms and Exercises in Syriac Grammar, 3 rd .ed., Oxford University Press, London, 1949.	
<参考書> William Jennings, Lexicon to the Syriac New Testament, Oxford at the Clarendon Press, 1926. Takamitsu Muraoka, Classical Syriac for Hebraists, Wiesbaden : O. Harrassowitz, 1987	
<学生に対する評価（方法・基準）> 予習・復習、積極的な授業参加の状況によって成績をつける。	

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
シリア語 b	佐藤 泉
後期・2単位	<登録条件> 通年で履修するのが望ましい。
<授業のテーマ> 聖書の古代訳の一つにペシッタ（シリア語訳）がある。ペシッタを読むためのシリア語文法の基礎を学ぶ。	
<到達目標> ①シリア語文法の基礎を身につける。②身につけたシリア語文法の基礎を生かし、辞書も用いながら、ペシッタを読むことができるようになる。	
<授業の概要> シリア語文法の学びを継続する。その後に講読に入るが、まず新約からマタイによる福音書の「山上の説教」、さらに旧約からエレミヤ書等をペシッタで読む。（箇所は未定。授業中に指示する。）	
<履修条件> ヒブル語履修済みであること並びにシリア語 a 履修済みであることが望ましい。	
<授業計画> 第1回：不規則動詞について（1） Pē Nūn 動詞の変化を学ぶ。 第2回：不規則動詞について（2） Lamed 喉音動詞の変化を学ぶ。 第3回：不規則動詞について（3） Pē 'alep 動詞の変化を学ぶ。 第4回：不規則動詞について（4） Pē Yōd 動詞の変化を学ぶ。 第5回：不規則動詞について（5） 二根字動詞の変化を学ぶ。 第6回：不規則動詞について（6） 二重'ayin 動詞の変化を学ぶ。 第7回：不規則動詞について（7） Lamed Hē・Lamed Yōd 動詞の変化を学ぶ。 第8回：「山上の説教」の講読（1） Jennings の辞書を引きながら、ペシッタを読むことに慣れる。 第9回：「山上の説教」の講読（2） 原典との比較をしつつ読むことを味わう。 第10回：「山上の説教」の講読（3） シリア語文法、特に不規則変化する名詞を確認しつつ読む。 第11回：「山上の説教」の講読（4） シリア語文法、特に動詞の変化を確認しつつ読む。 第12回：「山上の説教」の講読（5） シリア語が解釈に影響を与えている一例について話す。 第13回：エレミヤ書等の講読（1） ネストリウス派の書体・母音記号で読むことに慣れる。 第14回：エレミヤ書等の講読（2） シリア語文法を全体的に思い出しつつ読む。 第15回：エレミヤ書等の講読（3） 原典や七十人訳と比較しつつ読むことを味わう。	
<準備学習等の指示> 授業中に指示のあった練習問題等について、できる範囲で準備すること。	
<テキスト> Theodore H. Robinson, Paradigms and Exercises in Syriac Grammar, 3 rd .ed., Oxford University Press, London, 1949.	
<参考書> William Jennings, Lexicon to the Syriac New Testament, Oxford at the Clarendon Press, 1926. Takamitsu Muraoka, Classical Syriac for Hebraists, Wiesbaden: O. Harrassowitz, 1987. J. Payne Smith, A compendious Syriac dictionary: founded upon the Thesaurus Syriacus of R. Payne Smith, Winona Lake, Ind.: Eisenbrauns, 1998.	
<学生に対する評価（方法・基準）> 予習・復習、積極的な授業参加の状況によって成績をつける。	

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
修士論文指導演習 旧約神学 I	大住 雄一 小友 聡
後期・2単位	<登録条件>
<授業のテーマ> 翌年度前期末に修士論文を提出しようとする前期課程1年次生の論文執筆の指導と情報交換を行う。	
<到達目標> 修士課程修了にふさわしい論文が書けるようになる。	
<授業の概要> 論文を執筆することの意味とプロセスを解説し、テキスト研究及び二次文献の検索を行う。 毎回の授業は2名の教員が共に責任を負うが、主にそれぞれ以下の分野を担当する。 大住雄一：律法、預言者関係 小友聡：黙示文学、知恵文学関係	
<履修条件> 2019年9月に旧約に関する修士論文を提出する予定である者は、参加すること。	
<授業計画> 第1回：導入 論文執筆の意味 第2回：課題の見だし方 律法関係 第3回：課題の見だし方 預言者関係 第4回：課題の見だし方 文学関係 第5回：テキスト翻訳 律法関係 第6回：テキスト翻訳 預言者関係 第7回：テキスト翻訳 文学関係 第8回：テキストの構造解明 律法関係 第9回：テキストの構造解明 預言者関係 第10回：テキストの構造解明 文学関係 第11回：辞書、コンコルダンスの使い方 第12回：二次文献の検索方法 第13回：暫定的な文献表の作成 第14回：二次文献の使い方 第15回：方法を使いこなす	
<準備学習等の指示>	
<テキスト> ビブリア・ヘブライカほか、論文執筆者別に指示する。	
<参考書> 毎回必要な文献を指示する。	
<学生に対する評価（方法・基準）> 割り当てられた課題の発表（50%）、討論への貢献（50%）を総合して評価する。	

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係	
修士論文指導演習 旧約神学Ⅱ	大住 雄一 小友 聡
前期・2単位	<登録条件>
<授業のテーマ> 今年度前期末に修士論文を提出しようとする前期課程二年次生の論文執筆の指導と情報交換を行う。	
<到達目標> 修士課程修了に相応しい論文を執筆、完成させる。	
<授業の概要> 論文の準備研究を各自が発表し、参加者がこれについて質問し、意見を述べる。 毎回の授業は2名の教員が共に責任を負うが、主にそれぞれ以下の分野を担当する。 大住雄一：律法、預言者関係 小友聡：黙示文学、知恵文学関係	
<履修条件> 本年9月に旧約に関する修士論文提出予定者は参加すること	
<授業計画> 第1回：導入 論文執筆の手順 第2回：問題設定 律法関係 第3回：問題設定 預言者関係 第4回：問題設定 文学関係 第5回：研究史 律法関係 第6回：研究史 預言者関係 第7回：研究史 文学関係 第8回：主要テーゼ 律法関係 第9回：主要テーゼ 預言者関係 第10回：主要テーゼ 文学関係 第11回：論証過程 律法関係 第12回：論証過程 預言者関係 第13回：論証過程 文学関係 第14回：結論 第15回：最終的な質疑応答	
<準備学習等の指示>	
<テキスト> 論文執筆者別に指示する。	
<参考書> 毎回必要な文献を指示する。	
<学生に対する評価（方法・基準）> 学期末には暫定的に可否のみ通知するが、最終的に提出論文の成績が本演習の成績となる。	

聖書神学専攻・新約聖書神学関係	
新約聖書学特講Ⅱ a	中野 実
前期・2単位	<登録条件> 特になし
<授業のテーマ> ヘブライ書の釈義的研究	
<到達目標> 具体的な聖書テキストを、しかも原典で釈義する手続きを学ぶことができる。それによって聖書を学問的および主体的に解釈する力を身に付けることができる。	
<授業の概要> 今年度は、ヘブライ書の「釈義」という課題を一緒に学ぶ。序論的な事柄を学んだのち、各単元（ペリコペー）を分担しつつ、釈義していく。	
<履修条件> 通年で履修する事が好ましい。そうでない場合は、事前に担当者に相談すること。	
<p><授業計画></p> <p>①オリエンテーション</p> <p>②緒論Ⅰ いつ、どこで、誰によって執筆されたか？</p> <p>③緒論Ⅱ 誰に対して何のために書かれたか？ ローマ教会の背景？</p> <p>④緒論Ⅲ ヘブライ書の構成について</p> <p>⑤1章1-4節 学生による発表 本文批評上の問題、試訳、文法的説明、キーワード、キー概念の分析</p> <p>⑥1章1-4節 原典釈義 文脈、構成、背景</p> <p>⑦1章1-4節 原典釈義 節ごとの注解、解説</p> <p>⑧1章5-14節 学生による発表</p> <p>⑨1章5-14節 原典釈義 文脈、構成、背景</p> <p>⑩1章5-14節 原典釈義 節ごとの注解、解説</p> <p>⑪2章1-4節 学生による発表</p> <p>⑫2章1-4節 原典釈義 文脈、構成、背景</p> <p>⑬2章1-4節 原典釈義 節ごとの注解、解説</p> <p>⑭2章5-18節 学生による発表</p> <p>⑮2章5-18節 原典釈義 文脈、構成、背景</p>	
<準備学習等の指示> こつこつギリシャ語原典を読み、必要な注解書などと取り組む努力をする	
<テキスト> ギリシャ語新約聖書	
<参考書> 必要に応じてクラスで指示する。	
<学生に対する評価（方法・基準）> クラスへの積極的参加（出席、発表、質問、コメントなど）を求める。参加、分担発表（40%）、および（4000-5000字の）期末レポート（60%）によって総合的に評価する。出席が三分の二に達しない場合は、原則として評価の対象にしない。	

聖書神学専攻・新約聖書神学関係	
新約聖書学特講Ⅱb	中野 実
後期・2単位	<登録条件> 特になし
<授業のテーマ>ヘブライ書の釈義的研究	
<到達目標>具体的な聖書テキスト（しかも原典で）を釈義する手続きを学びながら、聖書を学問的および主体的に解釈する力を身につけることができる。	
<授業の概要>今年度はヘブライ書の「釈義」という課題を、一緒に分担しながら学ぶ。	
<履修条件>通年で履修する事が好ましい。そうでない場合は、事前に担当者と相談する事。	
<p><授業計画></p> <ul style="list-style-type: none"> ①2章5-18節 原典釈義 節ごとの注解、解説 ②3章1-6節 学生による発表 ③3章1-6節 原典釈義 文脈、構成、背景 ④3章1-6節 原典釈義 節ごとの注解、解説 ⑤3章7-19節 学生による発表 ⑥3章7-19節 原典釈義 文脈、構成、背景 ⑦3章7-19節 原典釈義 節ごとの注解、解説 ⑧4章1-11節 学生による発表 ⑨4章1-11節 原典釈義 文脈、構成、背景 ⑩4章1-11節 原典釈義 節ごとの注解、解説 ⑪4章12-13節 学生による発表 ⑫4章12-13節 原典釈義 節ごとの注解、解説 ⑬4章14-16節 学生による発表 ⑭4章14-16節 原典釈義 文脈、構成、背景 ⑮4章14-16節 原典釈義 節ごとの注解、解説 	
<準備学習等の指示>こつこつギリシャ語原典を読む努力をし、必要な注解書などと取り組むこと	
<テキスト>ギリシャ語新約聖書	
<参考書>必要に応じてクラスで指示する	
<学生に対する評価（方法・基準）>参加度、分担発表（40%）と（4000-5000字の）期末レポート（60%）によって総合的に評価する。ただし、出席が三分の二に達しない場合は、原則として評価の対象にしない。	

聖書神学専攻・新約聖書神学関係	
新約聖書原典釈義 I a	遠藤 勝信
前期・2単位	<登録条件> 原則として通年(a, b)で登録すること。但し、学期毎履修学生にも対応する。
<授業のテーマ> ヨハネの福音書11～13章の原典釈義。	
<到達目標> 研究史、釈義の方法論、及びテキストと真摯に向き合う姿勢を学ぶ。	
<授業の概要> はじめに近年のヨハネ福音書研究の動向(研究史、方法論)を概観し、釈義上の問題及び観点を確認する。その後、参加者による発表とディスカッション。	
<履修条件> 新約ギリシャ語原典テキスト読解力を有すること。	
<授業計画> <p>I. 講義を中心に</p> 第01回 研究史を概観し、近年の研究状況と釈義の諸問題を学ぶ。 第02回 ギリシャ語新約聖書本文批評の実際。 第03回 テキストの文学批評の実際。 第04回 テキストと歴史批評の実際。 <p>II. 演習(参加者による釈義の発表とディスカッション)を中心に</p> 第05回 ヨハネ11:47～57(イエス殺害計画)の原典釈義 第06回 ヨハネ12:01～11(香油注ぎ)の原典釈義 第07回 ヨハネ12:12～19(エルサレム入城)の原典釈義 第08回 ヨハネ12:20～26(ギリシア人來訪)の原典釈義 第09回 ヨハネ12:27～36(イエスの祈り)の原典釈義 第10回 ヨハネ12:37～43(拒絶)の原典釈義 第11回 ヨハネ12:44～50(さばき)の原典釈義 第12回 ヨハネ13:01～11(洗足)の原典釈義 第13回 ヨハネ13:12～20(洗足の意義)の原典釈義 第14回 ヨハネ13:21～30(ユダの裏切り予告)の原典釈義 <p>III. 総括</p> 第15回 釈義演習の総括的な反省と展望。	
<準備学習等の指示> クラスで取り上げる箇所ギリシア語テキストを十分読み、準備してクラスに出席すること。	
<テキスト> Nestle-Aland (28 th ed., 2012), <i>Novum Testamentum Graece</i>	
<参考書> R・ブルトマン著、杉原助訳『ヨハネの福音書』、2005年 R・A・カルペッパー著、伊東寿泰訳『ヨハネ福音書文学的解剖』2005年 R・ボウカム、浅野淳博訳『イエスとその目撃者たち』2011年 C.S. Keener, <i>The Gospel of John- A Commentary vol. 1</i> , 2003. M. Endo, <i>Creation and Christology - A Study on the Johannine Prologue</i> (WUNT), 2002. 他、クラスで随時紹介。	
<学生に対する評価(方法・基準)> 授業における発表と期末試験(指定されたテキストについての釈義ペーパー [6,000～8,000文字])。尚、出席が三分の二を満たさない場合、期末試験の受験を許可しない。	

聖書神学専攻・新約聖書神学関係	
新約聖書原典釈義 I b	遠藤 勝信
後期・2単位	<登録条件> 原則として通年(a, b)で登録すること。但し、学期毎履修学生にも対応する。
<授業のテーマ> ヨハネの黙示録18～21章の原典釈義。	
<到達目標> 研究史、釈義の方法論、及びテキストと真摯に向き合う姿勢を学ぶ。テキストの文学性、及び歴史との関連性を意識しつつ丁寧に釈義し、神学的考察へと向かえるようにする。	
<授業の概要> はじめに近年のヨハネ黙示録研究の動向(研究史、方法論)を概観し、釈義上の問題及び観点を確認する。その後、参加者による発表とディスカッション。釈義の正確さと共に慎重な議論の仕方、神学的掘り下げについて学び合う。	
<履修条件> 新約ギリシャ語原典テキスト読解力(ギリシャ語中級文法の知識があることが望ましい)を有すること。	
<授業計画> <p>I. 講義を中心に</p> <p>第01回 イントロダクション。黙示録の文学ジャンル。 第02回 黙示録を読む前に(その1): 黙示録の周辺、背景理解。 第03回 黙示録を読む前に(その2): 構造と構成、神学、他。 第04回 黙示録1～16章7節までを概観し、釈義の営みにおける課題と観点を確認する。</p> <p>II. 演習(参加者による発表とディスカッション)を中心に</p> <p>第05回 黙示録18:21～24 (バビロンへのさばき)の原典釈義 第06回 黙示録19:01～04 (大群衆の賛美)の原典釈義 第07回 黙示録19:05～10 (小羊の婚宴)の原典釈義 第08回 黙示録19:11～16 (白馬の騎手)の原典釈義 第09回 黙示録19:17～21 (白馬の騎手と軍勢の勝利)の原典釈義 第10回 黙示録20:01～06 (千年王国)の原典釈義 第11回 黙示録20:07～10 (サタン(の)敗北)の原典釈義 第12回 黙示録20:11～15 (最後のさばき)の原典釈義 第13回 黙示録21:01～08 (新天新地)の原典釈義 第14回 黙示録21:09～14 (新しいエルサレム)の原典釈義</p> <p>III. 総括</p> <p>第15回 釈義演習の総括的な反省と展望。</p>	
<準備学習等の指示> クラスで取り上げる箇所のギリシア語テキストを十分読み、準備してクラスに出席すること。	
<テキスト> Nestle-Aland (28 th ed., 2012), <i>Novum Testamentum Graece</i>	
<参考書> 佐竹明著『ヨハネの黙示録』(上・中巻)2009年 R・ボウカム著、飯郷友康・小河陽訳『ヨハネ黙示録の神学』2001年 R. Bauckham, <i>The Climax of Prophecy</i> , 1993. G. Beale, <i>The Book of Revelation</i> (NIGTC), 1999. D. Aune, <i>Revelation 6-16</i> (WBC), 1997. S. Smalley, <i>The Revelation of John</i> (IVP), 2005. 他、クラスで随時紹介。	
<学生に対する評価(方法・基準)> 授業における発表と期末試験(指定されたテキストの釈義ペーパー[6,000～8,000文字])。尚、出席が三分の二を満たさない場合、期末試験の受験を許可しない。	

聖書神学専攻・新約聖書神学関係	
修士論文指導演習 新約神学 I	中野 実 焼山 満里子
後期・2単位	<登録条件> 新約神学で修論を書く予定の学生
<授業のテーマ> 来年度に修士論文を提出予定の、新約聖書神学専攻の大学院一年生のための演習。	
<到達目標> 適切なテーマを選定することができ、論文を書くための技術を身につけることができる。	
<授業の概要> 論文を書くとはどういうことかを学びつつ、各自その課題を進めていく。毎回、学生の発表を中心に進められていく。全体としては二人の教員が共に責任を負うが、それぞれの指導担当学生との個別指導も織り交ぜながら行なわれる。	
<履修条件> 2019年9月に修論を提出予定の学生	
<p><授業計画></p> <ol style="list-style-type: none"> ①オリエンテーション ②論文を書くとは？ ③各自の課題、問題探し ④その課題、問題に関連するテキスト探し ⑤課題テキストについて深く学ぶ ⑥テーマの選定、見直し、決定 ⑦研究のための方法およびツールについて ⑧資料、先行研究探し ⑨先行研究の学び、 ⑩先行研究の学びとそこから展開 ⑪問題設定、テーゼへ向かって ⑫問題設定、テーゼの吟味 ⑬題名、目次作成へ向かって ⑭議論の組み立てへ向かって ⑮まとめ 	
<準備学習等の指示> 論文はモノログではないので、教師、学生との対話を大事にすること	
<テキスト> 必要に応じて、指示する。	
<参考書> 担当者は必要に応じて、指示する。	
<学生に対する評価（方法・基準）> クラスへの出席、課題への積極的参加度などによって総合的に評価する。テーマの選定、課題テキストの学び、先行研究の学び、論文を書く技術をみがくことなどに関して十分な努力をしているかどうかの評価の指標となる。	

聖書神学専攻・新約聖書神学関係	
修士論文指導演習 新約神学Ⅱ	中野 実 焼山 満里子
前期・2単位	<登録条件> 新約専攻の大学院2年生
<授業のテーマ> 今年度前期末に修論を提出予定の学生のための演習。	
<到達目標> 各自が修士論文を進めていくために必要な手助けが与えられ、論文を仕上げることができる。	
<授業の概要> 論文の執筆段階における、各自の研究発表が中心となる。指導教授および参加学生の質問や意見をききつつ、論文を仕上げていく。	
<履修条件>2018年9月に新約聖書神学専攻で修士論文を提出予定の学生	
<p><授業計画></p> <ol style="list-style-type: none"> ①オリエンテーション ②問題設定の点検 ③資料の点検 ④題名、目次、議論の枠組みを整える。 ⑤より明確な問題設定の獲得 ⑥(仮)序論の執筆 ⑦研究史に関する発表 ⑧研究史に基づく展開 ⑨論文のテーゼ、発表 ⑩論文のテーゼの点検 ⑪議論の組み立て 発表 ⑫議論の組み立て 点検 ⑬結論を書く ⑭論文のフォーマットの整理、注、文献表など。 ⑮まとめ 	
<準備学習等の指示>クラスで指示する	
<テキスト>必要に応じて、指示する	
<参考書>必要に応じて、指示する	
<学生に対する評価(方法・基準)>クラスへの出席、課題への参加度などによって、総合的に評価する。修士論文を仕上げていく課題にどれほど積極的に取り組んでいるかが評価の指標となる。	

組織神学専攻・組織神学関係	
組織神学特講 I a	須田 拓
前期・2単位	<登録条件> 学期毎の登録可
<p><授業のテーマ> 贖罪論の諸相を学ぶことを通して、教会が宣べ伝えてきた福音の中心について深い教義学的理解を持つことを目指す。</p>	
<p><到達目標> 贖罪という信仰の重要なテーマについて、歴史的にどのような議論があるのかを知り、自らこの問題について考えることができるようになる。</p>	
<p><授業の概要> 贖罪論について講義する。論点を整理した上で、特に宗教改革期やピューリタンたちの議論を概観し、現代の神学者たちの議論を踏まえつつ、あるべき贖罪論の姿を模索する。</p>	
<p><履修条件> 特になし</p>	
<p><授業計画> 第1回 オリエンテーション 第2回 贖罪論の論点(1) 福音の中心としての贖罪 第3回 贖罪論の論点(2) 贖罪論の類型とその問題 第4回 古代における贖罪論 アウグスティヌスの場合を中心に 第5回 宗教改革期の贖罪論(1) ルターとルター派の場合 第6回 宗教改革期の贖罪論(2) カルヴァンと改革派の場合 第7回 中間総括 第8回 ピューリタンの贖罪論(1) 国教会主義者たちの贖罪論 第9回 ピューリタンの贖罪論(2) 会衆派(ジョン・オーウェン, トマス・グッドウィン)の場合 第10回 ピューリタンの贖罪論(3) 長老派(リチャード・バクスター)の場合 第11回 ピューリタンの贖罪論(4) アルミニウス主義者と急進諸派 第12回 現代の贖罪論(1) ロバート・デールとピーター・フォーサイスの場合 第13回 現代の贖罪論(2) ジェームス・デニーの場合 第14回 現代の贖罪論(3) カール・バルトとヴォルフハルト・パネンベルクの場合 第15回 まとめ</p>	
<p><準備学習等の指示></p>	
<p><テキスト> 特になし</p>	
<p><参考書> 授業において、必要に応じて指示する</p>	
<p><学生に対する評価(方法・基準)> レポート(4,000字程度)によって評価する</p>	

組織神学専攻・組織神学関係	
組織神学特講 I b	須田 拓
後期・2単位	<登録条件> 学期毎の登録可
<p><授業のテーマ> 三位一体論の諸相を学ぶことを通して、現代神学の議論に触れ、深い教義学の理解を持つことを目指す。</p>	
<p><到達目標> 三位一体論の重要なテーマについて、現代神学にどのような議論があるのかを知り、自らこの問題について考えることができるようになる。</p>	
<p><授業の概要> 三位一体論について講義する。論点を整理した上で、現代の様々な神学者の議論を概観し、あるべき三位一体論の姿を模索する。</p>	
<p><履修条件> 特になし</p>	
<p><授業計画> 第1回 オリエンテーション 第2回 三位一体論の論点(1) 位格理解について 第3回 三位一体論の論点(2) 御業の理解について 第4回 位格とは何か(1) カール・バルトの場合 第5回 位格とは何か(2) ヴォルフハルト・パネンベルクとユルゲン・モルトマンの場合 第6回 位格とは何か(3) ジョン・ジジウラスの主張とその誤り 第7回 中間総括 第8回 御業について(1) カール・バルトの場合 第9回 御業について(2) ヴォルフハルト・パネンベルクとユルゲン・モルトマンの場合 第10回 御業について(3) ロバート・ジェンソンとコリン・ガントンの場合 第11回 御業について(4) 現代の様々な神学者の理解 第12回 三位一体論的神学をめぐって(1) 近年の批判 第13回 三位一体論的神学をめぐって(2) 批判への反論とピューリタンの神学 第14回 三位一体論の他分野への影響 第15回 まとめ</p>	
<p><準備学習等の指示></p>	
<p><テキスト> 特になし</p>	
<p><参考書> 授業において、必要に応じて指示する</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> レポート（4,000字程度）によって評価する</p>	

組織神学専攻・組織神学関係	
組織神学特講Ⅱ a	近藤 勝彦
前期・2単位	<登録条件> 学期ごとの登録可
<授業のテーマ> キリスト教教義学の問題として「罪と死と苦難の問題」を取り上げる。	
<到達目標> 法や心理や医の問題など経験科学の扱いと異なる神学的な罪・死・苦難の問題の理解を身に着ける	
<授業の概要> 教義学における扱いの配置として、創造論と贖罪論の「間」の問題とし、罪を論じ、それと死の関連を扱う。その上で救済史における苦難の問題をめぐって「神義論」の可否、そのあり方の議論に及ぶ	
<履修条件>	
<授業計画> 第1回 罪と死と苦難をめぐる現在の状況 第2回 罪の経験的認識と啓示的認識 第3回 罪の神学史概観 第4回 A. リッチュルの「罪の国」とK. バルトの罪論の問題 第5回 罪の本質と領域 第6回 原罪：罪の根源性、全体性、普遍性、不可避性 第7回 高慢、強欲、虚偽 第8回 罪の結果としての死 第9回 全体的な死と死の時 第10回 罰と審判 第11回 神義論と教義学 第12回 ライプニッツ、ヘーゲル、M. ヴェーバー 第13回 現代の神義論 第14回 キリストの十字架による神義論への解答 第15回 総括	
<準備学習等の指示>	
<テキスト> 講義テキストを配布する	
<参考書> 熊野義孝『教義学』、佐藤敏夫『キリスト教神学概論』、バルト『教会教義学・和解論』、ブルンナー『教義学Ⅱ』、Berkhof, Christian Faith, Michigan 1979 など	
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業内容と参考文献を資料にして、4000字前後のレポートを求め、示された理解度によって評価する。	

組織神学専攻・組織神学関係	
組織神学特講Ⅱb	近藤 勝彦
後期・2単位	<登録条件> 学期ごとの登録可
<授業のテーマ> 贖罪論とキリスト論を扱う	
<到達目標> キリスト教信仰の核心についての神学的な諸事項を理解し、現代の思惟として教義学的に考えることを身に着ける	
<授業の概要> 贖罪論とキリスト論の関係、両者をめぐる神学史的遺産を踏まえて、今日の教義学の可能性を示す	
<履修条件>	
<授業計画> 第1回 贖罪論とキリスト論の関係、贖罪論の教義学における位置について 第2回 贖罪論の教理史的カテゴリー 第3回 贖罪論史の概観（1）古代と中世 第4回 贖罪論史の概観（2）宗教改革者の贖罪論 第5回 贖罪論史の概観（3）フォーサイスとバルト 第6回 贖罪理解の聖書的表象（1） 第7回 贖罪理解の聖書的表象（2） 第8回 三位一体論的贖罪論 第9回 受肉論（御子の人間化）の意味 第10回 聖霊論的キリスト論と処女降誕 第11回 両性論とその困難 第12回 アンヒュポスタシスとエンヒュポスタシスをめぐって 第13回 謙卑と高举 第14回 キリストの時と職能 第15回 総括	
<準備学習等の指示>	
<テキスト> 講義テキストを配布する	
<参考書> 近藤勝彦『贖罪論とその周辺』、熊野義孝『教義学』、佐藤敏夫『キリスト教神学概論』、バルト『教会教義学・和解論』、ブルンナー『教義学Ⅱ』、Berkhof, Christian Faith, Michigan 1979 など	
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業内容と参考文献を資料にして、4000字前後のレポートを求め、その内容に示された理解度や探究姿勢によって評価する。	

組織神学専攻・組織神学関係	
組織神学特研 I	神代 真砂実
後期・2単位	<登録条件> 特になし。
<授業のテーマ> 2001年以降、つまり、今世紀に入ってから現れた組織神学関係の書物、あるいは、哲学書を精読し、内容を批判的に吟味しながら、組織神学的思考力を鍛える。	
<到達目標> ①文献の内容について深い理解を得る。②その内容を思想史的文脈や現代の課題との関連の中で考えられるようになる。③文献を批判的に読むことで、神学的な主体性を獲得する。	
<授業の概要> 2015年に出版されたもので、過去数十年の三位一体論の議論と批判的に対峙しようとしている K. Sonderegger, <i>Systematic Theology</i> , vol. 1 から、第一部と第二部を読み、議論を重ねながら、批判的に内容の理解を深めていく。	
<履修条件> 英語のテキストを毎回 10 頁程度読む覚悟のある者。なお、発表に高いレベルを求めるので、最低 4 名の履修者が得られない場合には、開講しない。	
<授業計画> 1. オリエンテーション 2. テキスト、pp. 3-9. (Part One: The One God, § 1. The Perfect Oneness of God/1) 3. テキスト、pp. 10-22. (Part One: The One God, § 1. The Perfect Oneness of God/2) 4. テキスト、pp. 23-30. (Part One: The One God, § 2. The Divine Oneness as Foundational Perfection/1) 5. テキスト、pp. 30-36. (Part One: The One God, § 2. The Divine Oneness as Foundational Perfection/2) 6. テキスト、pp. 36-45. (Part One: The One God, § 2. The Divine Oneness as Foundational Perfection/3) 7. テキスト、pp. 47-52. (Part Two: The Omnipresent One, § 3. The Perfection of the One Lord's Hiddenness: His Omnipresence/1) 8. テキスト、pp. 52-66. (Part Two: The Omnipresent One, § 3. The Perfection of the One Lord's Hiddenness: His Omnipresence/2) 9. テキスト、pp. 66-77. (Part Two: The Omnipresent One, § 3. The Perfection of the One Lord's Hiddenness: His Omnipresence/3) 10. テキスト、pp. 77-85. (Part Two: The Omnipresent One, § 3. The Perfection of the One Lord's Hiddenness: His Omnipresence/4) 11. テキスト、pp. 85-93. (Part Two: The Omnipresent One, § 3. The Perfection of the One Lord's Hiddenness: His Omnipresence/5) 12. テキスト、pp. 93-106. (Part Two: The Omnipresent One, § 3. The Perfection of the One Lord's Hiddenness: His Omnipresence/6) 13. テキスト、pp. 106-115. (Part Two: The Omnipresent One, § 3. The Perfection of the One Lord's Hiddenness: His Omnipresence/7) 14. テキスト、pp. 115-131. (Part Two: The Omnipresent One, § 3. The Perfection of the One Lord's Hiddenness: His Omnipresence/8) 15. テキスト、pp. 131-147. (Part Two: The Omnipresent One, § 3. The Perfection of the One Lord's Hiddenness: His Omnipresence/9)	
<準備学習等の指示> テキストに事前に目を通すことは大前提であるが、さらに内容や関連事項についても自分で調べ、考えてくることが重要である。	
<テキスト> 担当者が用意する Katherine Sonderegger, <i>Systematic Theology</i> , vol. 1 からのプリント。	
<参考書> 授業の中で適宜、指示する。	
<学生に対する評価(方法・基準)> 発表・授業への参加度・期末レポート(本文 8,000 字以上)の総合による。	

組織神学専攻・組織神学関係	
組織神学演習Ⅱ a	神代 真砂実
前期・2単位	<登録条件> 組織神学演習Ⅱ bとの通年履修が望ましい。
<授業のテーマ> 組織神学の代表的文献であるカール・バルトの『教会教義学』の精読を通して、組織神学的思考を養う。また、20世紀の代表的神学者であるバルトの神学思想の特色について基本的な事柄を理解する。	
<到達目標> ①高度な神学書の読解力を身に着ける。②バルトの神学的思惟の特徴を理解する。③バルトを通して教義学の特定の課題についての総合的な理解を身に着ける。	
<授業の概要> バルトの『教会教義学』から創造論中の倫理学、特に54節（「交わりの中での自由」）に展開される性・結婚・家庭・民族等にかかわる議論を学ぶ。テキストを精読し、その内容についての議論を重ね、また、適宜、解説を加えることで理解を深める。	
<履修条件> 難しい学びに挑戦し、自分の可能性を広げようとする意欲を持っていること。	
<p><授業計画></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. テキスト、3～16頁（1. 男と女①） 3. 同、16～29頁（同②） 4. 同、30～48頁（同③） 5. 同、48～65頁（同④） 6. 同、65～80頁（同⑤） 7. 同、80～91頁（同⑥） 8. 同、91～102頁（同⑦） 9. 同、102～116頁（同⑧） 10. 同、116～127頁（同⑨） 11. 同、127～143頁（同⑩） 12. 同、143～162頁（同⑪） 13. 同、162～170頁（同⑫） 14. 同、170～189頁（同⑬） 15. 同、189～210頁（同⑭） 	
<準備学習等の指示> 演習なので、必ずテキストをよく読んでから出席すること。	
<テキスト> カール・バルト、『教会教義学・創造論Ⅳ／2 創造者なる神の戒め〈ii〉』、吉永正義訳（新教出版社、オンデマンド）。	
<参考書> 授業の中で適宜、紹介する。	
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業への参加度（30%）および小課題（70%）による。	

組織神学専攻・組織神学関係	
組織神学演習Ⅱ b	神代 真砂実
後期・2単位	<登録条件> 組織神学演習Ⅱ a との通年履修が望ましい。
<授業のテーマ> 前期と同じ。	
<到達目標> 前期と同じ。	
<授業の概要> 前期と同じ。	
<履修条件> 前期と同じ。	
<p><授業計画></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーションおよびテキスト、210～220 頁 (1. 男と女⑮) 2. テキスト、220～227 頁 (同⑩) 3. 同、228～240 頁 (同⑰) 4. 同、241～260 頁 (2. 親と子①) 5. 同、260～275 頁 (同②) 6. 同、275～288 頁 (同③) 7. 同、288～307 頁 (同④) 8. 同、307～325 頁 (同⑤) 9. 同、326～338 頁 (3. 近い者と遠い者①) 10. 同、338～351 頁 (同②) 11. 同、351～366 頁 (同③) 12. 同、366～378 頁 (同④) 13. 同、378～389 頁 (同⑤) 14. 同、389～401 頁 (同⑥) 15. 一年の学びのまとめ 	
<準備学習等の指示> 前期と同じ。	
<テキスト> 前期と同じ。	
<参考書> 前期と同じ。	
<学生に対する評価(方法・基準)> 前期と同じ。	

組織神学専攻・組織神学関係	
信条学	芳賀 力
後期・2単位	<登録条件> 専攻に関係なく登録可。
<p><授業のテーマ> 歴史的教会の生み出した諸信条の特色を学ぶ。また教義学の項目に沿って、信条の神学を学ぶ。</p>	
<p><到達目標> 授業の前半で、まず古代教会の基本信条、次いで宗教改革期以後の代表的な信条の特色を把握する。授業の後半でロールスのテキストの各項目を一つずつ読み、実際に信条本文に触れながら、その神学的意味を理解する。</p>	
<p><授業の概要> 前半は資料を配付し、講義を行う。後半は担当を決め、教義学の主題ごとに発題し、コメントしてもらう。</p>	
<p><履修条件> 大学院博士課程前期・後期に在籍している者は誰でも履修できる。</p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回：信条・信仰告白とは何かを押さえた上で、使徒信条を学ぶ。</p> <p>第2回：ニケア・コンスタンティノポリス信条を学ぶ。またロールスのテキスト「啓示、神の言葉、伝統」の項目を読む。</p> <p>第3回：アタナシオス信条を学ぶ。またロールスのテキスト「神の本性と三位一体論」の項目を読む。</p> <p>第4回：カルケドン信条を学ぶ。またロールスのテキスト「創造と摂理」の項目を読む。</p> <p>第5回：ルター大・小教理問答を学ぶ。またロールスのテキスト「人間と罪」の項目を読む。</p> <p>第6回：アウグスブルク信仰告白を学ぶ。またロールスのテキスト「恵みの契約と和解」の項目を読む。</p> <p>第7回：ジュネーヴ教会信仰問答を学ぶ。またロールスのテキスト「キリスト論とカルヴァン主義的な外部」の項目を読む。</p> <p>第8回：フランス信仰告白を学ぶ。またロールスのテキスト「義認と信仰」の項目を読む。</p> <p>第9回：第一・第二スイス信仰告白を学ぶ。またロールスのテキスト「聖化と悔改め」の項目を読む。</p> <p>第10回：スコットランド信仰告白を学ぶ。またロールスのテキスト「選びと棄却」の項目を読む。</p> <p>第11回：ハイデルベルク信仰問答を学ぶ。またロールスのテキスト「教会とそのしるし」の項目を読む。</p> <p>第12回：ドルト信仰規準を学ぶ。またロールスのテキスト「御言葉と聖礼典」の項目を読む。</p> <p>第13回：ウェストミンスター信仰告白を学ぶ。またロールスのテキスト「神の言葉の二様態」の項目を読む。</p> <p>第14回：バルメン宣言を学ぶ。またロールスのテキスト「洗礼」の項目を読む。</p> <p>第15回：日本基督教団信仰告白を学ぶ。またロールスのテキスト「聖餐」の項目を読む。</p>	
<p><準備学習等の指示> 教室で渡す資料をよく整理し、保存しておくこと。</p>	
<p><テキスト> 『信条集 前後篇』新教出版社、1994年。各自購入すること。またJ・ロールス『改革教会信仰告白の神学』一麦出版社、2009年。研究室にて割引価格で頒布する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 出席と授業での発表、期末レポートを総合的に評価する。</p>	

組織神学専攻・組織神学関係	
修士論文指導演習 組織神学 I	神代 真砂実
後期・2単位	<登録条件> 狭義の組織神学および実践神学の分野で修士論文を執筆する予定の者。
<授業のテーマ> 修士論文執筆のために必要な技能を学ぶこと、および、修士論文の準備をすること。	
<到達目標> ①組織神学の論文を書くとはどういうことか、そのために必要な技能や作業は何か、を身に着けること。②修士論文執筆に備えての基礎的準備作業（主要文献の読解等）を終えること。	
<授業の概要> 前半では主に論文執筆の過程を学ぶ。後半では各自の修士論文の準備を進めて貰い、順番に報告・発表して貰う。	
<履修条件> 2019年度に修士論文提出予定の者は必修。	
<p><授業計画></p> <p>第1回 オリエンテーション——論文の基本的要件</p> <p>第2回 発表①：各自の論文の主題について</p> <p>第3回 論文作成の技法①：テキストの分析——全体的な内容の把握</p> <p>第4回 論文作成の技法②：テキストの分析——構成を把握する</p> <p>第5回 論文作成の技法③：テキストの分析——書き方を考える</p> <p>第6回 論文作成の技法④：主題の決定・文献探しについて</p> <p>第7回 論文作成の技法⑤：リサーチ・主張（テーゼ）の発見・目次の検討</p> <p>第8回 論文作成の技法⑥：パラグラフ</p> <p>第9回 発表②：修士論文の主題と文献について（1）</p> <p>第10回 発表③：同（2）</p> <p>第11回 発表④：内容の構想について（1）</p> <p>第12回 発表⑤：同（2）</p> <p>第13回 発表⑥：同（3）</p> <p>第14回 発表⑦：修士論文の主題と文献表と基本構想（1）</p> <p>第15回 発表⑧：同（2）</p>	
<準備学習等の指示> 授業をきちんと受けること・自分の研究を着実に進めること。	
<テキスト> 担当者が用意するプリント。	
<参考書> 泉忠司、『90分でコツがわかる！ 論文&レポートの書き方』（青春出版社）。	
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業への参加度および発表による。	

組織神学専攻・組織神学関係	
修士論文指導演習 組織神学Ⅱ	神代 真砂実
前期・2単位	<登録条件> 狭義の組織神学および実践神学の分野で学期末に修士論文を提出予定の者
<授業のテーマ> 修士論文の作成にあたり、適切な内容と形式について学ぶ。	
<到達目標> 修士論文を完成・提出すること。	
<授業の概要> 各自の学びの成果を順に報告して貰うことで内容を検討すると共に、論文の体裁を持つ短い文章を書いて貰いながら、形式面での基本的技法を学ぶ。	
<履修条件> 2018年9月に狭義の組織神学および実践神学の分野で修士論文を提出予定の者は必修。	
<p><授業計画></p> <p>第1回 オリエンテーション——修士論文の基本的要件の確認</p> <p>第2回 各自の論文の主題と文献について①</p> <p>第3回 各自の論文の主題と文献について②</p> <p>第4回 各自の論文の主題と文献について③</p> <p>第5回 主要文献の読書報告①</p> <p>第6回 主要文献の読書報告②</p> <p>第7回 主要文献の読書報告③</p> <p>第8回 二次文献から学んだことについての報告①</p> <p>第9回 二次文献から学んだことについての報告②</p> <p>第10回 二次文献から学んだことについての報告③</p> <p>第11回 主張（テーゼ）と目次と内容の構想について①</p> <p>第12回 主張（テーゼ）と目次と内容の構想について②</p> <p>第13回 主張（テーゼ）と目次と内容の構想について③</p> <p>第14回 主張（テーゼ）と目次と内容の構想について④</p> <p>第15回 形式面の確認・提出の要領について</p>	
<準備学習等の指示> 最大限の時間と能力とを傾注すること。	
<テキスト> 特になし。	
<参考書> 特になし。	
<学生に対する評価（方法・基準）> 発表による。	

組織神学専攻・歴史神学関係	
教理史演習Ⅱ a	棚村 重行
前期・2単位	<登録条件> 組織神学分野専攻者の履修が望ましい。
<授業のテーマ> 「洗礼、聖餐、教会と職務－中世・宗教改革から現代まで」	
<到達目標> 主題についての現代神学的学びの後、第一次史料を読みながら、各時代の諸教理を検討し、それらの現代的意義を論じる。	
<授業の概要> 前期では「洗礼と聖餐」の教理の発展を扱う。先ずWCCの「リマ文書」の洗礼と聖餐の合意を学ぶ。中世・宗教改革時代から近代の諸教派、そして日本基督教団の信仰告白や礼拝式文に表現された教理を検討する。	
<履修条件> 特にない。	
<p><授業計画></p> <p>第1回：コースの紹介。履修者との導入討議</p> <p>第2回：発表（一） 「リマ文書」の「洗礼」について。（学生2～3名）</p> <p>第3回：発表（二） 「リマ文書」の「聖餐」について。（学生2～3名）</p> <p>第4回：資料研究（一） 中世の洗礼と聖餐論1（第四ラテラノ公会議、その他公式教令文書）</p> <p>第5回：資料研究（二） 同上 2（枢機卿カジェタン、S. プリエリアス、C. ヘーン）</p> <p>第6回：資料研究（三） 宗教改革の洗礼と聖餐論1（ルターとルター派の「一致信条書」他）</p> <p>第7回：資料研究（四） 同上 2（ツヴィングリ、プリンガーと「第二スイス信仰告白」）</p> <p>第8回：資料研究（五） 同上 3（カルヴァンとジュネーヴの諸信仰告白。「ハイデルベルク信仰問答」）</p> <p>第9回：資料研究（六） 同上 4（イングランド教会の「三十九箇条」その他）</p> <p>第10回：資料研究（七） 同上 5（再洗礼派および関連諸信仰宣言）</p> <p>第11回：資料研究（八） 同上 6（トレント公会議およびその後の近・現代カトリックの諸教令など）</p> <p>第12回：資料研究（九） ピューリタニズムの洗礼と聖餐論（「ウェストミンスター信仰告白」、「サボイ宣言」、「ロンドン宣言」）</p> <p>第13回：資料研究（十） メソディズムの洗礼と聖餐論（J.ウェスレーと「宗教箇条」）</p> <p>第14回：資料研究（十一） 日本の諸教派の洗礼と聖餐論1（改革－長老派系、会衆派系、メソヂスト系、バプテスト系、その他）</p> <p>第15回：資料研究（十二） 同上 2 日本基督教団の「口語式文」における洗礼と聖餐理解、まとめ</p>	
<準備学習等の指示> 講義形式で第一次資料を読むので、予習よりも復習を重視すること。	
<テキスト> 『洗礼・聖餐・職務－教会の見える一致をめざして』（教団出版局）。A.E.マクグラース『宗教改革の思想』（教文館）。	
<参考書> 授業中に指示する。	
<学生に対する評価（方法・基準）> 1. 発表を除き、平生は資料研究中心なので、積極的に質疑応答に参加すること。2. 期末には、各自洗礼と聖餐のテーマについて、興味のある二つの異なる人物、運動の教理を取り上げ、第一次史料を分析し比較・検討せよ。現代神学と実践の立場からそれら教理の意義をレポートで論ぜよ。（分量は、400字詰めで25枚以内）。	

組織神学専攻・歴史神学関係	
教理史演習Ⅱ b	棚村 重行
後期・2単位	<登録条件> 前期に同じ。
<授業のテーマ> 「洗礼、聖餐、教会と職務―中世・宗教改革から現代まで」	
<到達目標> 主題についての現代神学的学びの後、第一次史料を読みながら、各時代の諸教理を検討し、それらの現代的意義を論じる。	
<授業の概要> 後期では「教会と職務」の教理の発展を扱う。まず WCC の「リマ文書」等の教会と職務の合意を学ぶ。中世・宗教改革時代から近代の諸教派、そして日本基督教団の信仰告白や礼拝式文に表現された教理を検討する	
<履修条件> 特にない。	
<p><授業計画></p> <p>第1回：コース紹介。履修者との導入討議。</p> <p>第2回：発表（一） 「教会」についての現代の教理論文を読む。（学生2～3名）</p> <p>第3回：発表（二） 「リマ文書」の「職務」について。（学生3～4名）</p> <p>第4回：資料研究（一） 中世の教会と職務論1（中世の教会と職務への公式教令文書）</p> <p>第5回：資料研究（二） 同上 2（トマス・アクイナス、ヤン・フス、教皇ピウス二世等）</p> <p>第6回：資料研究（三） 宗教改革の教会と職務論1（ルターとルター派の「一致信条書」他）</p> <p>第7回：資料研究（四） 同上 2（ツヴィングリ、プリンガーと「第二スイス信仰告白」）</p> <p>第8回：資料研究（五） 同上 3（カルヴァンとジュネーヴの諸信仰告白、「ハイデルベルク信仰問答」）</p> <p>第9回：資料研究（六） 同上 4（イングランド教会の「三十九箇条」その他）</p> <p>第10回：資料研究（七） 同上 5（再洗礼派および関連諸信仰宣言）</p> <p>第11回：資料研究（八） 同上 6（トレント公会議およびその後の近・現代のカトリックの諸教令など）</p> <p>第12回：資料研究（九）ピューリタニズムの教会と職務論（「ウェストミンスター信仰告白」、「サボイ宣言」、「ロンドン宣言」）</p> <p>第13回：資料研究（十）メソディズムの教会と職務論（J.ウェスレーと「宗教箇条」）</p> <p>第14回：資料研究（十一）日本の諸教派の教会と職務論1（改革―長老派系、会衆派系、メソヂスト系、バプテスト系、その他）</p> <p>第15回：資料研究（十二） 同上 2 日本基督教団の「口語式文」における教会と職務理解、まとめ。</p>	
<準備学習等の指示> 講義形式で第一次資料を読むので、予習よりも復習を重視すること。	
<テキスト> 『洗礼・聖餐・職務―教会の見える一致をめざして』（教団出版局）。A.E.マクグラース『宗教改革の思想』（教文館）。	
<参考書> 授業中に指示する。	
<学生に対する評価（方法・基準）> 1. 発表を除き、平生は資料研究中心なので、積極的に質疑応答に参加すること。2. 期末には、各自洗礼と聖餐のテーマについて、興味のある二つの異なる人物、運動の教理を取り上げ、第一次史料を分析し比較・検討せよ。現代神学と実践の立場からそれら教理の意義をレポートで論ぜよ。（分量は、400字詰めで25枚以内）。	

組織神学専攻・歴史神学関係	
教会史特講 I a	棚村 重行
前期・2単位	<登録条件> 通年で履修することが望ましい。
<授業のテーマ> 「英米日・福音主義の歴史—神学・信仰復興・教会形成」	
<到達目標> 履修者が、英米日の教会関係史のコンテキストにおいて、17世紀～20世紀の主要な信仰復興・教会形成の福音主義神学にかんする第一次史料テキストを読み、歴史洞察を深めることを目指す。	
<授業の概要> 前期では、最初に日本の「福音主義の歴史」研究の批評を行う。その上で「国際教会関係史」の視点を提起し、17～19世紀前半（1650-1860）までの英米のピューリタニズムと移植の展開、第一次、第二次大覚醒運動期の福音主義神学と信仰復興運動論、教会形成史について、講義と史料分析を行う。	
<履修条件> 現代・近代プロテスタント神学思想の基本的な知識、あるいは英米教会史・神学思想史などへのある程度の関心と素養が必要である。	
<p><授業計画></p> <p>第1回：コース紹介。導入講義：日本の「福音主義」「福音主義の歴史」研究の批評(佐藤敏、古屋、青木他)</p> <p>第2回：講義（一）：アメリカ教会史と神学思想史論の吟味：F. ボンヘッフアー、W. G. マックラクリン他</p> <p>第3回：史料分析（一）：17～18世紀「ピューリタン大覚醒」（T. フッカー）と英国メソジズム（ウェスレー）</p> <p>第4回：講義（二）：18世紀北米における「第一次大覚醒運動」（1730～1760）植民地時代の三大教派の出現</p> <p>第5回：史料分析（二）：J. エドワーズ（1）：「[ニューイングランド信仰復興の忠実な報告]」</p> <p>第6回：史料分析（三）：J. エドワーズ（2）：「信仰復興についての幾つかの考察」</p> <p>第7回：講義（三）：18世紀北米のメソジズム神学、信仰復興、教会形成：「宗教箇条」、A. クラーク</p> <p>第8回：講義（四）：19世紀前半の「第二次大覚醒運動」（1800～1830）開拓時代の三大教派成長</p> <p>第9回：史料分析（四）：19世紀前半の新派カルヴァン主義神学の誕生：N. W. テイラー、L. ビーチャー</p> <p>第10回：史料分析（五）：C. G. フィニー（1）：回心についての説教、「組織神学」から抜粋テキスト</p> <p>第11回：史料分析（六）：C. G. フィニー（2）：「宗教の復興とは何か？」</p> <p>第12回：史料分析（七）：長老派内の新派カルヴァン主義：A. バーンズ 「救いの道」</p> <p>第13回：史料分析（五）：メソジストの神学、信仰復興、教会形成：P. カートライト、D. D. ウィードン</p> <p>第14回：講義（五）：幕末開国期日本：改革派-長老派-衆衆派型およびメソジスト型「二つの福音」問題</p> <p>第15回：講義（六）：若き植村正久、本多庸一：福音主義神学、信仰復興、教会形成。FD実施。</p>	
<準備学習等の指示> テキストの予習と復習が大切である。	
<テキスト> ①W. G. Mcloughlin, <i>The American Evangelicals, 1800-1900</i> , Harper and Low, 1968(コピー本で配布)。②D. A. Sweeney, <i>The American Evangelical Story</i> , Baker, 2005. (部分的にコピー資料として配布)。	
<参考書> 授業の中で、教員が追って指示する。	
<学生に対する評価(方法・基準)> 前期で扱ったテーマを一つ取り上げ、それに関連した重要な第一次史料を批判的に分析し自分の解釈にもとづくレポートを作成し、提出する。分量は400字詰め原稿用紙に換算して20-25枚以内。	

組織神学専攻・歴史神学関係	
教会史特講 I b	棚村 重行
後期・2単位	<登録条件> 通年で履修することが望ましい。
<授業のテーマ> 「英米日・福音主義の歴史—神学・信仰復興・教会形成」	
<到達目標> 英米日の教会関係史のコンテキストにおいて、17世紀～20世紀の主要な信仰復興・教会形成の福音主義神学の第一次史料テキストを読み、歴史洞察を深める。	
<授業の概要> 後期では、最初に日本の「福音主義の歴史」研究の批評を行う。その上で「国際教会関係史」の観点を確立し、19世紀後半～20世紀後半（1865-2010）までの米日の第三次、第四次大覚醒運動期の福音主義神学と信仰復興運動論、教会形成史について講義と史料分析を行う。	
<履修条件> 前期に同じ。	
<p><授業計画></p> <p>第1回：コースの紹介。講義（一）「マックラクリンの北米大覚醒運動史」のおさらい</p> <p>第2回：講義（二）：19世紀後半の北米神学の諸相：南北戦争以後の北米の社会と宗教の変貌（T.L. スミス）</p> <p>第3回：史料分析（一）：19世紀後半の「第三次大覚醒運動」（1870～1920）「都市の信仰復興」について</p> <p>第4回：史料分析（二）：D. L. ムーディー（1）：ムーディーの諸説教にみる福音主義神学と教会</p> <p>第5回：史料分析（三）：D.L. ムーディー（2）：彼の信仰復興論「教会に行かぬ人に福音をどう届けるか？」</p> <p>第6回：講義（三）：20世紀初頭の日本の「大挙伝道」および「神の国」運動：本多庸一、植村正久、賀川豊彦</p> <p>第7回：史料分析（四）：20世紀前半の第一次世界大戦後の北米の「近代主義」対「根本主義」論争</p> <p>第8回：講義（四）：A. J. シンプソン：『四重の福音』；A. J. ゴードン『み霊の務め』</p> <p>第9回：史料分析（五）：日本における神学の変貌：中田重治のホーリネス神学と逢坂元吉郎の高教会神学</p> <p>第10回：講義（五）：20世紀後半の「第四次大覚醒〔戦後信仰復興〕運動」（1950～1990?）</p> <p>第11回：史料分析（六）：ビリー・グラハム（1）：略歴と神学諸テーマ（啓示、創造と墮罪、贖罪）</p> <p>第12回：史料分析（七）：ビリー・グラハム（2）：諸テーマ（救済、教会、説教と聖礼典、終末論）</p> <p>第13回：講義（六）：第二次世界大戦後日本における「戦後信仰復興運動」の神学、信仰復興、教会形成</p> <p>第14回：講義（七）：1980年代後の英米日の福音主義諸派の動向：北米の「宗教的右派」、「福音派」の動向</p> <p>第15回：総合討論：通年の学びからみた「福音主義」とその歴史の総括。FD実施</p>	
<準備学習等の指示> 前期に同じ。	
<テキスト> ①W. G. Mcloughlin, <i>The American Evangelicals, 1800-1900</i> , Harper and Low, 1968(コピー本で配布)。② D. A. Sweeney, <i>The American Evangelical Story</i> , Baker, 2005. (部分的にコピー資料として配布)。	
<参考書> 授業の中で、教員が追って指示する。	
<学生に対する評価（方法・基準）> 後期で扱ったテーマを一つ取り上げ、それに関連した重要な第一次史料を批判的に分析し自分の解釈にもとづくレポートを作成せよ。分量は400字詰め原稿用紙に換算して20-25枚以内。	

組織神学専攻・歴史神学関係	
教理史特講 I a	関川 泰寛
前期・2単位	<登録条件> 特になし
<p><授業のテーマ> ニカイアからカルケドンまで（前半）</p>	
<p><到達目標> ニカイアからカルケドンに至る古代教父のうちエウセビオス～バシレイオスまでの緒論とともに、キリスト論、救済論、聖霊論などの形成と展開を歴史的に跡付けて内容を修得する。</p>	
<p><授業の概要> テキストに沿いながら、主題について講義をする。同時に、指定した一次史料を読解する。</p>	
<p><履修条件> 特になし</p>	
<p><授業計画></p> <ol style="list-style-type: none"> 1 教会史の誕生：エウセビオスの時代と著作、神学 2 エウセビオスの政治神学 3 エウセビオスの教会史を読む 4 アタナシオスとニカイア神学の形成：アレイオス論争の経緯とアレイオス神学の特質 5 アタナシオスの生涯、著作 6 アタナシオス神学の特質Ⅰ：キリスト論と受肉論：『言の受肉』を読む。 7 アタナシオス神学の特質Ⅱ：聖霊論：『セラピオンへの手紙』を読む 8 アタナシオスにおける政治と神学 9 砂漠の師父と『アントニオス伝』：『アントニオス伝』を読む 10 デイデュモスの生涯と神学 11 エヴァグリオスの著作と神学 12 カップパドキア教父の生涯と時代 13 バシレイオスの時代と生涯 14 バシレイオスの神学：『聖霊論』を読む 15 まとめ 	
<p><準備学習等の指示> 古代教理史を復習しておくこと。</p>	
<p><テキスト> Francis, Young, <i>From Nicaea to Chalcedon</i>, Second Edition, Baker Academic, 2010 Chapters 1～4 テキストは内容を翻訳し、要約したものを配布するので、購入する必要はない。</p>	
<p><参考書> その都度指示する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 討議での貢献と小論文による。</p>	

組織神学専攻・歴史神学関係	
教理史特講 I b	関川 泰寛
後期・2単位	<登録条件> 特になし
<p><授業のテーマ> ニカイアからカルケドンまで（後半）</p>	
<p><到達目標> ニカイアからカルケドンに至る古代教父のうちナジアンゾスのグレゴリオス～カルケドン定式までの緒論とともに、キリスト論、救済論、聖霊論などの形成と展開を歴史的に跡付けて内容を修得する。</p>	
<p><授業の概要> テキストに沿いながら、主題について講義をする。同時に、指定した一次史料を読解する。</p>	
<p><履修条件> 特になし</p>	
<p><授業計画></p> <ol style="list-style-type: none"> 1 ナジアンゾスのグレゴリオスの生涯と著作 2 ナジアンゾスのグレゴリオスの神学：『神学講話』を読む 3 ニュッサのグレゴリオスの生涯と著作 4 ニュッサのグレゴリオスの神学：『雅歌講話』を読む。 5 教会の説教者、教師、牧会者としてのカッパドキア教父 6 4世紀後半の教父の活動 7 シリアのエフライム 8 エルサレムのキュリオスの時代と神学 9 クリュソストモスの時代と神学 10 キリスト論論争の背景と経過 11 アポリナリオス 12 ネストリオス 13 アレキサンドリアのキュリオス 14 カルケドン定式 15 まとめ 	
<p><準備学習等の指示> 古代教理史を復習しておくこと。</p>	
<p><テキスト> Francis, Young, <i>From Nicaea to Chalcedon</i>, Second Edition, Baker Academic, 2010 Chapters 5～6 テキストは内容を翻訳し、要約したものを配布するので、購入する必要はない。</p>	
<p><参考書> その都度指示する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 討議での貢献と小論文による。</p>	

組織神学専攻・歴史神学関係	
修士論文指導演習 歴史神学 I	関川 泰寛
後期・2単位	<登録条件> 特になし
<p><授業のテーマ> 修士論文作成のための訓練を行う。特に一次史料と二次史料の読み方、論理的な思考力と文章表現を確認した上で、修士論文の作成指導を行う。</p>	
<p><到達目標> 修士論文作成のためのスキルと理論的な基礎を習得する。</p>	
<p><授業の概要> 歴史神学の領域で修士論文提出予定者の指導を行う。論文の中間発表を行い、相互の批評、研鑽を重ねる。</p>	
<p><履修条件> 特になし</p>	
<p><授業計画></p> <ol style="list-style-type: none"> 1 一次史料の読み方：史料の読解 2 一次史料の分析 3 二次史料の読み方：歴史神学の学術論文の読解 4 二次史料の分析 5 論文の構想 6 論文の表現方法 7 参考文献と注 8 修士論文の中間発表：主題の提示 9 修士論文の中間発表：全体の構成 10 修士論文の中間発表：主題の展開 11 修士論文の中間発表：校正と注 12 歴史神学論文の特色 13 修士論文をめぐる討議：史料の読解と扱い 14 修士論文をめぐる討議：構成と表現 15 総括とまとめ 	
<p><準備学習等の指示> 澤田昭夫『論文の書き方』（講談社）を復習しておくこと。</p>	
<p><テキスト> 特に定めない。</p>	
<p><参考書> その都度指示する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> クラスでの貢献、発表，小論文</p>	

組織神学専攻・歴史神学関係	
修士論文指導演習 歴史神学Ⅱ	関川 泰寛
前期・2単位	<登録条件> 特になし
<p><授業のテーマ> 修士論文作成のための基礎知識の習得と訓練を行う。</p>	
<p><到達目標> 一次史料と二次史料の読み方、論理的な思考力と文章表現を身につけることを目標とする。</p>	
<p><授業の概要> 歴史神学の領域で修士論文提出予定者の指導を行う。論文の中間発表を行い、相互の批評、研鑽を重ねるとともに、研究を深める。Cantor, How to Study History を読みながら、歴史神学の論文作成の方法を学ぶ。</p>	
<p><履修条件> 特になし</p>	
<p><授業計画></p> <p>I 歴史神学の論文を書くための基礎作業</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 歴史神学とは テキスト発表① A Matter of Definition 2 一次史料と二次史料 テキスト発表② The Materials of History 3 一次史料を読む テキスト発表③ How to Use Primary Sources i 4 一次史料を読む テキスト発表④ How to Use Primary Sources ii 5 二次史料を読む テキスト発表⑤ How to Read Secondary Sources i 6 二次史料を読む テキスト発表⑥ How to Read Secondary Sources ii 7 歴史神学論文を読む テキスト発表⑦ A Practical Lesson in How to Read a History Book i 8 歴史神学論文を読む テキスト発表⑧ A Practical Lesson in How to Read a History Book ii <p>II 修士論文作成の準備</p> <ol style="list-style-type: none"> 9 作成の注意と準備 10 論文の計画と執筆、注のつけ方 11 論文計画発表① 目次、参考文献表 12 論文計画発表② 注の付け方、テーゼの提示 13 論文計画発表③ テーゼの論証の叙述方法 14 ディカッション 15 まとめ 	
<p><準備学習等の指示> 学部演習のテキストを読みなおして、復習しておくこと。</p>	
<p><テキスト> Norman Cantor, How to Study History 関川が準備する。</p>	
<p><参考書> その都度指示する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> クラスでの貢献、発表、小論文</p>	

組織神学専攻・実践神学関係	
実践神学演習 a	小泉 健
前期・2単位	<登録条件>
<p><授業のテーマ> 前期はウィリモン『牧師——その神学と実践』をテキストとして、牧師論について学ぶ。</p>	
<p><到達目標> ウィリモンの書物を理解することよりも、ウィリモンに助けられて牧師論についての考え方を身につけること。さらに、日本の教会のためにふさわしい牧師像を創造的に考察できるようになること。</p>	
<p><授業の概要> 毎回担当者が割り当てられた箇所についての要約とコメントをし、その上で、日本の教会における牧師の実際と関連づけながら討論する。</p>	
<p><履修条件></p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回 オリエンテーション 日本の教会における牧師像 第2回 第1章 任職 第3回 第2章 21世紀の牧師職 第4回 第3章 祭司としての牧師 第5回 第4章 牧師としての祭司 第6回 第5章 聖書解釈者としての牧師 第7回 第6章 説教者としての牧師 第8回 第7章 カウンセラーとしての牧師 第9回 第8章 教師としての牧師 第10回 第9章 伝道者としての牧師 第11回 第10章 預言者としての牧師 第12回 第11章 リーダーとしての牧師 第13回 第12章 人格者としての牧師 第14回 第13章 訓練されたキリスト者としての牧師 第15回 まとめ 日本の教会におけるこれからの牧師像</p>	
<p><準備学習等の指示> 必ず事前にテキストを読み、質問やコメントを用意してくること。</p>	
<p><テキスト> ウィリアム・ウィリモン『牧師——その神学と実践』新教出版社、2007年。</p>	
<p><参考書></p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 発表、討論への参加によって評価する。</p>	

組織神学専攻・実践神学関係	
実践神学演習 b	小泉 健
後期・2単位	<登録条件>
<p><授業のテーマ> 後期はポール・バスデン『現代の礼拝スタイル』をテキストとして、礼拝の形態について学ぶ。</p>	
<p><到達目標> バスデンの書物は北アメリカの教会を背景にしており、多様な現状を記述することを主眼としている。書物から情報を得ることにとどまらずに、もっと踏み込んだ神学的な評価を目指し、さらに日本の教会の礼拝の実態と照らし合わせながら、実践的な礼拝学的思考を身につけること。</p>	
<p><授業の概要> 毎回担当者が割り当てられた箇所についての要約とコメントをし、その上で、日本の教会における礼拝の現状や課題と関連づけながら討論する。</p>	
<p><履修条件></p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回 オリエンテーション 問題としての礼拝 第2回 第1章 礼拝とは何か 第3回 第2章 礼拝と教会成長の関係 第4回 第3章 礼拝のスタイルとは何か 第5回 第4章 リタージカル・スタイルの礼拝 第6回 第5章 トラディショナル・スタイルの礼拝 第7回 第6章 リヴァイヴァリスト・スタイルの礼拝 第8回 第7章 プレイズ・アンド・ワーシップ・スタイルの礼拝 第9回 第8章 シーカー・サービス・スタイルの礼拝 第10回 第9章 礼拝のスタイルの選択（礼拝スタイルの比較） 第11回 承前（礼拝の目的と礼拝のスタイル） 第12回 第10章 礼拝の諸要素について（音楽、祈り） 第13回 承前（神の言葉、 sacrament、奉獻） 第14回 第11章 礼拝に備えるために 第15回 まとめ わたしたちの礼拝改革</p>	
<p><準備学習等の指示> 必ず事前にテキストを読み、質問やコメントを用意してくること。</p>	
<p><テキスト> ポール・バスデン『現代の礼拝スタイル その多様性と選択を考える』キリスト新聞社、2008年。</p>	
<p><参考書> J. F. ホワイト『プロテスタント教会の礼拝 その伝統と展開』日本キリスト教団出版局、2005年。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 発表、討論への参加によって評価する。</p>	

組織神学専攻・実践神学関係	
キリスト教教育特研 a キリスト教教育特研	朴 憲郁
前期・2単位	<登録条件> 特になし
<p><授業のテーマ> 敬虔主義的伝統における教育の意義と展開</p>	
<p><到達目標> 宗教改革後の正統主義派に抗して起こった敬虔主義運動の中に、理論と実践における優れた教育的貢献を見ることができる。近代教育の創始者といわれるモラヴィア派のコメニウスはそこから排出された。それらの経緯と内的関連を考察する。</p>	
<p><授業の概要> 敬虔主義運動の中心に立つモラヴィア兄弟団とそこから多大な影響を受けたジョン・ウェスレーの神学思想の特徴を見、それが必然的に教育的展開をもち、日曜学校運動へと繋がることを跡づけ、確認していく。</p>	
<p><履修条件> 特になし</p>	
<p><授業計画></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 敬虔主義と教育―序説 2. ドイツ敬虔主義の創始者 Ph. J. シュペーナーの主張 3. A.H.フランケのキリスト教的人間形成理論 4. N.L.ツィンツェンドルフによる継承と発展―神学と教育― 5. 教育史におけるモラヴィア派の意義―ヘルンフト居住とその後― 6. J.ウェスレーとモラヴィア派―出会いとイギリス帰国後の活動― 7. フランケとウェスレーにおける聖化の強調、「キリスト者の完全」 8. モラヴィア派との訣別―ツィンツェンドルフとの対話― 9. J.ウェスレーにおける義認と聖化 10. J.ウェスレーのキリスト教教育論 11. J.ウェスレーとキングスウッド・スクール―当時の宗教教育状況― 12. J.ウェスレーと日曜学校運動 13. アメリカ・メソジスト監督教会の日曜学校運動―初期 14. アメリカ・メソジスト監督教会の日曜学校運動―組織的發展 15. 全体的考察―総括― 	
<p><準備学習等の指示> 毎回の授業の前半に、受講生が順次発表するが、非発表者も次回扱うテキスト箇所を事前に読んでおくこと。</p>	
<p><テキスト> 青山学院大学キリスト教文化研究センター編、『ジョン・ウェスレーと教育』、ヨルダン社、1999年。各自購入しておくこと。購入困難な場合は、担当講師が調達する。</p>	
<p><参考書> 授業時に随時、紹介する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 授業数の2/3以上の出席を前提として、各自の発表と毎回の授業参加度、およびレポート（4000～5000字、その際参考文献2冊以上列挙、利用のこと）提出を評価する。</p>	

組織神学専攻・実践神学関係	
臨床牧会教育 a	ウェイン・ジャンセン
前期・2単位	<登録条件>
<p><授業のテーマ> 病院での実習により、牧会的な心得を身につけること。</p>	
<p><到達目標> 自分の牧会者像を明確にする。</p>	
<p><授業の概要> 吉祥寺病院（精神科）を実習のフィールドとして、医師、看護師、ソーシャルワーカー等の協力を得、患者との面接を行い、講師のスーパーヴィジョンを受けて、実際的にカウンセリングを学ぶ。</p>	
<p><履修条件> 講義は登録者2人以上から6人未満で成立する。</p>	
<p><授業計画></p> <p>*オリエンテーション</p> <p>*院長による精神病理の講義。病院見学。</p> <p>*病棟で患者と面接を行い、ケアを与えることを学ぶ。</p> <p>*面接記録をスーパーヴァイザー（担当教員）に提出し、コメントをうける。</p> <p>*各学生によるケース提出とディスカッションを行う。</p> <p>第1回から第15回まで、様々な牧会ケアテーマで学び、自分の牧会者像を明確にする。</p>	
<p><準備学習等の指示> 遅刻をしないこと。 休まないこと。</p>	
<p><テキスト></p>	
<p><参考書></p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 実習の参加度によって評価する。 期末面談によって評価する。</p>	

組織神学専攻・実践神学関係	
臨床牧会教育 b	ウェイン・ジャンセン
後期・2単位	<登録条件>
<p><授業のテーマ> 病院での実習により、牧会的な心得を身につけること。</p>	
<p><到達目標> 自分の牧会者像を明確にする。</p>	
<p><授業の概要> 吉祥寺病院（精神科）を実習のフィールドとして、医師、看護師、ソーシャルワーカー等の協力を得、患者との面接を行い、講師のスーパーヴィジョンを受けて、実際的にカウンセリングを学ぶ。</p>	
<p><履修条件> 臨床牧会教育 a を終えていること。</p>	
<p><授業計画></p> <p>*各回、各病棟におもむき、患者と出会い、カウンセリングを行う。</p> <p>*面接記録（逐語記録）をつくり、スーパーヴァイザー（担当教員）に提出し、コメントを得、話し合いをする。</p> <p>*各自のケース・レポートをし、ケース・スタディをする。</p> <p>第1回から第15回まで、様々な牧会ケアテーマで学び、自分の牧会者像を明確にする。</p>	
<p><準備学習等の指示> 遅刻をしないこと。 休まないこと。</p>	
<p><テキスト></p>	
<p><参考書></p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 実習の参加度によって評価する。 期末面談によって評価する。</p>	

専攻間共同科目	
アジア伝道論演習 a	朴 憲郁
前期・2単位	<登録条件> 通年履修が望ましいが、半学期の履修もできる。
<p><授業のテーマ> 東北・東南アジア・キリスト教伝道の歴史と現実</p>	
<p><到達目標> 東北・東南アジア諸国におけるキリスト教の意義と役割を基本的に理解することを目指す。</p>	
<p><授業の概要> 伝道(宣教)学とは何かを序論として解説した後、一国に絞らず、むしろテキストに沿って、東北および東南のアジア諸国におけるキリスト教と伝道の足跡を、その文化と歴史と共に、前・後期に亘って概観する。そのことが、日本伝道の特色とあり方を自覚・反省する素材となることを願う。</p>	
<p><履修条件> 特にない</p>	
<p><授業計画></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 伝道論(宣教学)とは何か(講義) 2. 伝道論の歴史的経緯、ニュービギンの宣教学(講義) <p>(以下、3から14まで発表と討議、コメント)</p> <ol style="list-style-type: none"> 3. 景教の東方伝道、韓国のキリスト教(初期カトリック史) 4. 韓国のキリスト教(プロテスタント史) 5. 中国のキリスト教(初期カトリック史) 6. 中国のキリスト教(プロテスタント史) 7. 台湾のキリスト教(16世紀～18世紀) 8. 台湾のキリスト教(19世紀～現代) 9. 香港のキリスト教 10. フィリピンのキリスト教 11. タイのキリスト教 12. マレーシアのキリスト教 13. ミャンマー、カンボジアのキリスト教 14. ベトナム、ラオスのキリスト教 15. 総括 	
<p><準備学習等の指示> 紹介する文献の中から、授業で扱う当該箇所に関して事前に読んで理解を深めておくこと。</p>	
<p><テキスト> 『アジア・キリスト教の歴史』、日本基督教団出版局編、1991年。各自で購入。購入困難であればプリント配布する。</p>	
<p><参考書></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 『アジア・キリスト教史[1]』、1989三版、2. 『アジア・キリスト教史[2]』、1985年初版、重版、教文館。その他、授業時に随時紹介する。 	
<p><学生に対する評価(方法・基準)> 授業時の発表、参加度、学期末レポート(6000字以上)などによって評価する。 出席が2/3に満たない者は評価の対象としない。</p>	

専攻間共同科目	
アジア伝道論演習 b	朴 憲郁
後期・2単位	<登録条件> 通年履修が望ましいが、半学期の履修もできる。
<p><授業のテーマ> 南方アジア・キリスト教伝道の歴史と現実</p>	
<p><到達目標> 南方アジア諸国におけるキリスト教の意義と役割を基本的に理解することを目指す。</p>	
<p><授業の概要> アジアのキリスト教について解説し、その特質を把握した後、前期に続いて南方広域アジア諸国のキリスト教と伝道の足跡を、その文化と歴史と共に概観する。そのことが、日本伝道の特色とあり方をも自覚的に反省する素材となることを願う。</p>	
<p><履修条件> 特になし</p>	
<p><授業計画></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. アジアのキリスト教の特色と課題 2. アジアのキリスト教における伝道論 <p>(以下、3～14まで発表と討議、コメント)</p> <ol style="list-style-type: none"> 3. シンガポールのキリスト教 4. インドネシアのキリスト教 (歴史と文化、カトリック宣教) 5. インドネシアのキリスト教 (プロテスタント宣教) 6. インドのキリスト教 (歴史と文化、カトリック宣教) 7. インドのキリスト教 (プロテスタント宣教) 8. スリンランカのキリスト教 9. バングラディシユのキリスト教 10. パキスタン・アフガニスタンのキリスト教 11. ブータン・ネパールのキリスト教 12. チベット・シッキムのキリスト教 13. オーストラリアのキリスト教 14. ニュージーランドのキリスト教 15. 東南アジアのキリスト教を回顧して (講義) 	
<p><準備学習等の指示> 紹介する文献の中から、授業で扱う当該箇所に関して事前に読んで理解を深めておくこと。</p>	
<p><テキスト> 『アジア・キリスト教の歴史』、日本基督教団出版局編、1991年。各自で購入。購入困難であればプリント配布する。</p>	
<p><参考書></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 『アジア・キリスト教史[1]』、1989 三版、2. 『アジア・キリスト教史[2]』、1985 年初版、重版、教文館。その他、授業時に随時紹介する。 	
<p><学生に対する評価(方法・基準)> 授業時の発表、参加度、学期末レポート(6000字以上)などによって評価する。 出席が2/3に満たない者は評価の対象としない。</p>	

実践神学研修課程	
説教学演習 I	小泉 健
前期・2単位	<登録条件>
<p><授業のテーマ> 説教の本質を問う説教学的議論に触れつつ、説教作成の方法を吟味し学ぶ。</p>	
<p><到達目標> 説教作成の方法を職人芸のようにして身につけるだけではなく、つねに説教学的な反省と結びつけながら批判的に習得し、説教者として自己研鑽していくための土台を得ること。</p>	
<p><授業の概要> 説教準備の一つ一つの段階の意味について考察しつつ、最初の黙想から説教行為までの実際に取り組む。</p>	
<p><履修条件></p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回 説教と聖書、説教テキストの朗読 第2回 黙想とは何か 第3回 説教学の課題 課題①第一黙想の提出 第4回 釈義と説教準備 第5回 歴史的方法と正典、礼拝における「聖書」、釈義とは何か 第6回 説教学的な聖書の解釈、「解釈と適用」の問題 課題②釈義の提出 第7回 説教黙想とは何か 第8回 釈義と教理、説教と教義学 第9回 説教における説教者 課題③説教黙想の提出 第10回 会衆をめぐる黙想 第11回 キリストの物語とわたしたちの生活 第12回 説教と救済史、終末をめぐる黙想 課題④第二の説教黙想の提出 第13回 説教の構造と構成 第14回 説教の始め方と終わり方 第15回 説教の演述 課題⑤説教原稿の提出</p> <p>*通常の時間だけでは学生による実演を行うことができないので、自由参加による実演クラスを行う。 日時の候補は、A案)火曜3限、B案)火曜4限、C案)木曜1限、D案)木曜か金曜の6限 第1回目の授業の際に決定する。</p>	
<p><準備学習等の指示> 聖書全巻を通読しておくこと。日々の祈りと黙想の生活を確立すること。</p>	
<p><テキスト></p>	
<p><参考書> R. ボーレン『説教学Ⅰ』『説教学Ⅱ』日本基督教団出版局（Ⅱはオンデマンド） その他については、テーマごとに教室で指示する。</p>	
<p><学生に対する評価（方法・基準）> 説教作成の諸段階で、その都度レポートを提出する。</p>	

実践神学研修課程	
説教学演習Ⅱ	小泉 健
後期・2単位	<登録条件> 説教学演習Ⅰを履修済み(予定)
<p><授業のテーマ> 説教学の基本を学び、会衆席の説教学として実際になされた説教を分析する方法を身につける。</p>	
<p><到達目標> 多様な説教に触れて説教理解を拡大し、説教を享受する力を磨くこと。</p>	
<p><授業の概要> 説教分析の方法論を明確にし、実際になされた説教を取り上げて、説教分析に実際に取り組む。</p>	
<p><履修条件></p>	
<p><授業計画></p> <p>第1回 会衆席の説教学 第2回 分析(1) 植村正久の説教を読む 第3回 なぜ説教を「分析」するのか?—説教分析論 第4回 分析(2) 渡邊善太の説教を読む 第5回 どこで心が燃えたか?—印象批評と第一印象論 第6回 分析(3) 竹森満佐一の説教を読む 第7回 その説教は何をしているのか?—説教の構造と構成をめぐる問題 第8回 分析(4) 加藤常昭の説教を読む 第9回 説教における「わたし」は何者か?—説教における説教者をめぐる問題 第10回 分析(5) マルティン・ルーサー・キングの説教を読む 第11回 だれに向かって語っているのか?—説教における聞き手をめぐる問題 第12回 分析(6) カール・バルトの説教を読む 第13回 その説教の「テキスト」は何か?—説教と聖書テキストをめぐる問題 第14回 分析(7) ルドルフ・ボーレンの説教を読む 第15回 神の御声が聞こえてきたか?—説教における神の名</p> <p>*前期に引き続き、自由参加による実践クラスを行う。後期は参加者の説教の説教分析を行う。 日時は参加者の都合を聞いて決定する。</p>	
<p><準備学習等の指示> 聖書全巻の通読を続けること。配布される論文、説教を十分読んで準備すること。</p>	
<p><テキスト> 毎回、論文または説教を教室で配布する。</p>	
<p><参考書> 加藤常昭『説教批判・説教分析』教文館、2008年。</p>	
<p><学生に対する評価(方法・基準)> 発表と授業への参加度、レポートによって評価する。</p>	

実践神学研修課程	
説教学演習Ⅲ	大住 雄一
後期・2単位	<登録条件>
<授業のテーマ> 実際に説教を作成し、同級生の前で語り、それについて説教批判を受けてみる。	
<到達目標> 伝道者として説教を担当できるようになる。	
<授業の概要> 担当者を決めて、指定された聖書テキストに従って説教を準備し説教する。また説教批評を共有し、説教者としての自己吟味の能力を養う。	
<履修条件> 修士論文を提出し、受理されて、博士課程前期課程修了見込みである者。	
<p><授業計画></p> <ol style="list-style-type: none"> 01. 諸信条、信仰告白・信仰問答における説教 説教とは何か 説教者とは何か 02. テキストの選び方、区切り方 03. 信徒研修会・修養会の開会礼拝 04. 信徒研修会・修養会の閉会礼拝 05. わたしの福音1 マタイによる 06. わたしの福音2 マルコによる 07. わたしの福音3 ルカによる 08. わたしの福音4 ヨハネによる 09. わたしの福音5 書簡による 10. 旧約聖書による説教1 律法と福音 11. 旧約聖書による説教2 旧約と新約 12. 聖餐式のある日の説教1 救いの契約 13. 聖餐式のある日の説教2 教会のしるし 14. 洗礼式のある日の説教 15. まとめ 	
<準備学習等の指示>	
<テキスト> 普段教会で使っている聖書（日本語）	
<参考書> その都度指示する。	
<学生に対する評価（方法・基準）> 説教の内容と語り方全体また説教批評も重視される。	

実践神学研修課程	
礼拝学演習	小泉 健
後期・2単位	<登録条件> 修士論文を提出し、2019年4月に教会、学校に赴任する意志が明確であること
<授業のテーマ> 礼拝学の基本、特に教会の礼拝を司る者が身につけるべき礼拝学的思考の特質を学ぶ。	
<到達目標> 教会や学校で礼拝を整え、奉仕者を指導し、結婚式、葬式等の諸式を執り行うことができるようになること。	
<授業の概要> 主日礼拝の主要な要素や、主日礼拝以外の諸礼拝、結婚式、葬儀などについて、毎回テーマを定め、参加者の発表を通して学ぶ。	
<履修条件>	
<授業計画> 第1回 礼拝学的思考の特質について 第2回 聖書における礼拝 第3回 宗教改革の礼拝 第4回 典礼の刷新、東方教会の奉神礼 第5回 現代の礼拝、礼拝改革 第6回 礼拝式と祈祷、祝祷 第7回 賛美、礼拝音楽 第8回 献金・奉獻、礼拝奉仕 第9回 洗礼式、幼児洗礼と幼児祝福 第10回 聖餐礼典 第11回 結婚式・婚約式 第12回 葬儀 第13回 礼拝堂、礼拝堂の使用 第14回 教会暦と聖書日課 第15回 教会学校の礼拝、学校礼拝	
<準備学習等の指示> 発表者だけでなく、参加者全員が自分なりの課題や意見を整理して演習に臨むこと。	
<テキスト>	
<参考書> 由木康『礼拝学概論』新教出版社、2011年。 W. ナーゲル『キリスト教礼拝史』教文館、1998年（オンデマンド）。 その他については第1回の授業時にテーマごとに紹介する。	
<学生に対する評価（方法・基準）> 発表と授業への参加度によって評価する。	

実践神学研修課程	
牧会学演習	小泉 健
後期・2単位	<登録条件> 修士論文を提出し、2019年4月に教会、学校に赴任する意志が明確であること
<授業のテーマ> 実践神学を牧師学としてとらえ、牧師が身につけるべき基本を学ぶ。	
<到達目標> さまざまな牧会の場面において、ふさわしい対応ができる基礎を得ること。ただ一つの正解があるわけではなく、その都度の対応が求められるが、それを神学的に反省する力を身につけること。	
<授業の概要> 牧師が担うべき教務、牧師が実践活動を行う場面を一つずつ取り上げ、参加者の発表を通して必要な知識と方法を身につける。	
<履修条件>	
<授業計画> 第1回 牧師学としての実践神学 第2回 召命と准允・按手、「牧師職」、赴任と離任、招聘制度と牧会 第3回 教会でのふるまい、教会での人間関係 第4回 告解・面談・訪問 第5回 結婚と離婚、同性愛 第6回 キリスト者の家庭と信仰の継承 第7回 病者の牧会、病床訪問 第8回 精神障がい者の牧会、牧会カウンセリング 第9回 高齢者の牧会 第10回 葬儀とその周辺 第11回 洗礼への導きと受洗準備、受洗後教育 第12回 聖餐と牧会 第13回 教会戒規 第14回 教会会議（教会総会、役員会）と議長職 第15回 全体教会と個教会、教会の制度、教会共同体の形成	
<準備学習等の指示> 発表者だけでなく、参加者全員が自分なりの課題や意見を整理して演習に臨むこと。	
<テキスト>	
<参考書> E. トゥルナイゼン『牧会学Ⅰ』『牧会学Ⅱ』日本基督教団出版局、1961、1970年（オンデマンド）。 ウィリアム・ウィリモン『牧師』新教出版社、2007年。 その他については第1回の授業時にテーマごとに紹介する。	
<学生に対する評価（方法・基準）> 発表と授業への参加度によって評価する。	

実践神学研修課程	
総合特別講義	小泉 健
後期・4単位	<登録条件> 修士論文を提出し、2019年4月に教会・学校に赴任する意志の明確な者
<授業の到達目標及びテーマ> 牧会・伝道上直面する問題、課題に適切に対応していくために必要な学びである。	
<授業の概要> その分野の専門家が、テーマごとの講義を行うオムニバス形式の総合講義である。	
<履修条件> 原則として全回出席すること。	
<授業計画> 第1回：関川泰寛教授「東京神学大学史Ⅰ」歴史的歩み＝前史 第2回：関川泰寛教授「東京神学大学史Ⅰ」歴史的歩み＝合同神学校以後 第3回：関川泰寛教授「東京神学大学史Ⅱ」日本基督教団関係史（紛争前） 第4回：関川泰寛教授「東京神学大学史Ⅱ」日本基督教団関係史（紛争後） 第5回：山口隆康講師「日本基督教団史Ⅰ」日本基督教団成立前 第6回：山口隆康講師「日本基督教団史Ⅰ」日本基督教団成立後 第7回：長山信夫講師「日本基督教団史Ⅱ」教団史と紛争史の視点 第8回：長山信夫講師「日本基督教団史Ⅱ」「教団紛争」とは何であったか？ 第9回：大住雄一教授「日本基督教団教憲・教規」 第10回：大住雄一教授「各教会規則・宗教法人規則」 第11回：川島隆一講師「部落解放とキリスト教」 第12回：川島隆一講師「部落解放とキリスト教」 第13回：小島誠志講師「地方伝道」 第14回：小島誠志講師「地方伝道」 第15回：岩田昌路講師「青年伝道」 第16回：岩田昌路講師「青年伝道」 第17回：山崎忍講師「刑務所伝道」 第18回：山崎忍講師「刑務所伝道」 第19回：春原禎光講師「ITと伝道」 第20回：春原禎光講師「ITと伝道」 第21回：山崎ハコネ講師「高齢者ケアと牧会」 第22回：山崎ハコネ講師「高齢者ケアと牧会」 第23回：篠浦千史講師「障がい者と教会」 第24回：篠浦千史講師「障がい者と教会」 第25回：朴米雄講師「在日コリアン問題」 第26回：朴米雄講師「在日コリアン問題」 第27回：愛澤豊重講師「キリスト教系諸宗団の問題」 第28回：愛澤豊重講師「キリスト教系諸宗団の問題」 第29回：石橋秀雄講師「教会付属幼稚園・保育園（所）の諸問題」 第30回：石橋秀雄講師「教会付属幼稚園・保育園（所）の諸問題」 第31回：棚村重行特任教授「エキュメニズムⅠ（世界のエキュメニズム）」 第32回：棚村重行特任教授「エキュメニズムⅠ（世界のエキュメニズム）」 第33回：朴憲郁特任教授「エキュメニズムⅡ（東アジアのエキュメニズム）」 第34回：朴憲郁特任教授「エキュメニズムⅡ（東アジアのエキュメニズム）」 第35回：野村忠規講師「牧会者の試練とその克服」 第36回：野村忠規講師「牧会者の試練とその克服」 ※講師は予定。当該年度に決定する。	
<準備学習等の指示> 日本基督教団の補教師試験を受験する者は、「補教師試験の過去問題集」に目を通しておくこと。	
<テキスト> 「日本基督教団史」「教務関係書式集」「日本基督教団教憲教規および諸規則」等、講師がその都度指示する。	
<参考書> 担当教授、講師が講義の中で紹介する。	
<学生に対する評価（方法・基準）> 教職セミナーを含む毎回の講義の出席を評価の前提とする。また、牧会にあたってどういうことが有益であり、学習したかを学年末に2000字以内にまとめて提出する。そして、その末尾に今後の総合講義に対する意見を一言述べること。	